

生活文化創造都市推進事業

高松地域会議実施報告書

平成26年3月

一般財団法人 日本ファッション協会



はじめに

一般財団法人日本ファッション協会では、地域振興事業として、平成 15（2003）年度より「生活文化創造都市推進事業」に取り組んでいます。

これは、欧米から始まり、今や世界で 100 以上の都市が取り組んでいる 21 世紀型の都市モデル「創造都市=Creative City」をベースに、「豊かな生活文化の創造」を目指す当協会として、地域独自の文化に根差した市民の活発な創造活動こそが豊かな生活文化を育み、産業の振興にもつながるとの認識のもと推進している事業です。

より多くの地域の方々にこの「生活文化創造都市」の考え方をご紹介し、ご理解いただくことを目的に、毎年、地域に赴き、シンポジウム形式の「地域会議」を開催しております。

本報告書は、平成 25 年 9 月 25 日（水）に、香川県高松市で開催しました「生活文化創造都市推進事業『高松地域会議』」の内容をご紹介するものです。

高松地域会議では、基調講演に文化庁前長官の近藤誠一様をお迎えし、高松市副市長 勝又正秀様はじめパネルディスカッションにご出演いただいた諸先生方、並びにフロア参加の皆さまからも数々の貴重なご意見をいただきました。

ぜひ本報告書をご高覧いただき、まちづくりのこれからの取組みのご参考にしていただければ幸いです。

平成 26 年 3 月

一般財団法人 日本ファッション協会

目 次

| | |
|------------------------------------|----|
| はじめに | 3 |
| 目次 | 4 |
| 開催概要 | 5 |
| 出演者のプロフィール | 7 |
| 主催者挨拶 | |
| 坪田 秀治 一般財団法人 日本ファッション協会 専務理事 | 8 |
| 来賓挨拶 | |
| 勝又 正秀氏 高松市副市長 | 10 |
| 第1部 基調講演 | |
| 「創造性と地方都市の再興」 | |
| 近藤 誠一氏 文化庁前長官 | 12 |
| 第2部 パネルディスカッション | |
| 「創造性と都市の魅力づくり」 | 21 |
| 視察会記録 | |
| 高松地域会議視察会開催概要 | 42 |
| 高松丸亀町商店街 訪問記録 | 43 |
| 讃岐石材加工協同組合 訪問記録 | 50 |

【開催概要】

開催日時：平成25年9月25日（水）14：00～16：30

会場：高松市美術館 講堂（高松市紺屋町10-4）

主催：一般財団法人 日本ファッション協会

後援：高松市、高松商工会議所

テーマ：地域の魅力を引き出す創造都市

参加費：無料

参加人数：120人

【プログラム】

| | | |
|------------|--|---------|
| 主催者挨拶 | （一財）日本ファッション協会 専務理事 | 坪田 秀治 |
| ホストシティ代表挨拶 | 高松市 副市長 | 勝又 正秀氏 |
| 第1部 | 基調講演「創造性と地方都市の再興」 文化庁前長官 | 近藤 誠一氏 |
| 第2部 | パネルディスカッション 「創造性と都市の魅力づくり」 ◆コーディネーター 大阪市立大学大学院創造都市研究科教授 | 佐々木 雅幸氏 |
| | ◆パネリスト（五十音順） NPO法人瀬戸内こえびネットワーク事務局長 | 甘利 彩子氏 |
| | 高松市 副市長 | 勝又 正秀氏 |
| | 新潟市中央区長 | 高橋 建造氏 |
| | 小豆島ヘルシーランド株式会社 代表取締役会長 NPO法人オリーブ生活文化研究所 理事長 | 柳生 好彦氏 |
| | ◆コメンテーター | 近藤 誠一氏 |

【出演者プロフィール】

<敬称略>

| 第1部 基調講演「創造性と地方都市の再興」 | |
|---|--|
|  <p>近藤 誠一 文化庁前長官</p> | <p>1972年外務省入省。在米国日本大使館参事官、同公使、外務省経済局総務参事官などを経て、外務省経済局審議官、OECD（経済協力開発機構）事務次長、外務省広報文化交流部長、国際貿易・経済担当大使、UNESCO（国連教育科学文化機関）日本政府代表部特命全権大使、駐デンマーク特命全権大使。2010年7月30日より2013年7月8日まで文化庁長官。</p> |
| 第2部 パネルディスカッション「創造性と都市の魅力づくり」 | |
| ◆コーディネーター | |
|  <p>佐々木 雅幸 大阪市立大学大学院 創造都市研究科 教授 同都市研究プラザ 所長</p> | <p>金沢大学経済学部助教授等を経て、1992年金沢大学経済学部教授、ボローニャ大学客員研究員。2000年立命館大学政策科学部教授。2003年より大阪市立大学大学院創造都市研究科教授。2007年同大都市研究プラザ所長。著書『創造都市への挑戦：産業と文化の息づく街へ』など</p> |
| ◆パネリスト (五十音順) | |
|  <p>甘利 彩子 NPO 法人瀬戸内こえび ネットワーク 事務局長</p> | <p>関西の美術大学卒業後、京都で活動。2004年香川県で放送局に就職。同時期、高松市内にセレクト古書店オープン。その後、フリーランスで多岐にわたるまちの仕事に携わる。2009年NPO法人アーキペラゴ入社、瀬戸内国際芸術祭ボランティアサポーター「こえび隊」立上げに従事。2012年2月NPO法人瀬戸内こえびネットワーク事務局長就任。</p> |
|  <p>勝又 正秀 高松市副市長</p> | <p>1990年、旧・建設省に入省。住宅政策、道路行政、建設業対策などを担当。1999年～2003年、島根県庁に出向。2008年～2011年、国土交通省に新設された観光庁で外国人観光客誘致を担当。2011年7月より、現職。</p> |
|  <p>高橋 建造 新潟市中央区長</p> | <p>1981年新潟市奉職。2005年企画財政局市政創造推進室長、2007年政策企画部政策監（同年5月から2008年サミット推進課長兼務）、2010年地域・魅力創造部次長（同年6月から新潟市美術館長兼務）、2012年地域・魅力創造部長、2013年4月から現職。</p> |
|  <p>柳生 好彦 小豆島ヘルシーランド株 式会社 代表取締役会長 NPO法人オリーブ生活 文化研究所 理事長</p> | <p>1985年小豆島ヘルシーランド(株)設立、代表取締役社長就任。1989年小豆島青年会議所理事長就任、1997年土庄町議会議員当選、2006年小豆島ヘルシーランド代表取締役会長就任、2009年NPO法人オリーブ生活文化研究所設立、理事長就任。2011年土庄町議会議員退任</p> |

主催者挨拶

一般財団法人日本ファッション協会
専務理事
坪田秀治

主催者を代表しまして一言ご挨拶を申し上げます。今日は、事前の申し込みが約 120 名で、県外、高松市以外からも 30 名ほどの方がご参加されているとのことで、本当にありがとうございます。

私どもは、本日、この会を主催します日本ファッション協会ですが、皆さんファッションという繊維製品やファッションショーといったことを連想されるのではないのでしょうか。われわれの『ファッション』は狭い意味でのファッションではなく、広い意味での『ファッション』と捉えております。

日本ファッション協会は、今から 23 年前の平成 2 年、当時、東急グループ総帥の五島昇さんが日本商工会議所の会頭のときに、衣食住の枠を超えた生活文化の向上を推進しようと提唱されてきた団体です。

したがって、われわれもいろいろな事業をやっておりますが、10 月 14 日から始まります「2014 春夏東京コレクション」は別の団体が主催しているものです。

特徴的な事業を具体的に申し上げますと、一つは日本クリエイション大賞という顕彰事業を行っています。新しい創造的なものや活動を顕彰するもので、ちなみに第 1 回の表彰対象となったのがテレフォンカードでした。今やほとんど使われていませんが、26 年前には画期的なツールということで、大賞を授与いたしました。昨年は、東京に代官山というところがありますが、そこに蔦屋という“大人”を対象にした、レコードや CD の貸し出しもする素晴らしい書店ができましたので、そこが大賞を受賞しました。新しく復元されました東京駅も表彰しています。

二つ目は国際交流という意味で、日本はじめ中国、韓国、シンガポール、タイ、ベトナムの 6 カ国でアジアファッション連合会事業を推進しています。これは、単なるファッションだけではなく、広い意味での生活文化の向上をアジアの国々と一緒になって目指そうという事業です。

三つ目が映画です。皆さんにどんどんいい映画を観ていただいて、生活文化の向上に役立てただけで、「シネマ夢倶楽部」という事業を推進しております。毎年、日本で上映された洋画・邦画すべての中から、約 30 人の推薦委員の投票によってベストシネマを選出しております。表彰式はいつも 3 月に実施しておりますけれども、今年はどんな映画が表彰されるのか、非常に楽しみなところでもあります。

もう一つ、日本の若者のファッションの定点観測を行い、インターネットを通じて発信しています。東京の中でも渋谷、銀座、代官山など若者たちが多く集まる場所で、そこを通る若者のファッションを毎週撮影し、その写真やインタビューをインターネットで世界に発信しています。このサイトは日本人よりも、アジアの人たちの閲覧比率が圧倒的に高くなっています。約 6 割から 7 割は海外の人たちが、日本の若者たちがどのようなファッションをしているのかを見ているわけです。

そしてもう一つが、今日この地域会議を開催する地域振興事業です。この事業は、もともと平成5年から主に繊維の地場産業都市を対象に、「ファッションタウン構想」を推進しておりましたが、平成15年から、当時ヨーロッパから全世界に広がりつつありました都市モデルである「創造都市＝creative city」という概念を取り込みまして、地域独自の歴史や文化に根差した豊かな生活文化が、産業の振興にもつながるような地域づくりを目指そうと、「生活文化創造都市事業」として推進しているものです。

昨年の地域会議は熊本市で開催させていただきました。今回、その熊本市からもご出席いただいております。また、今年のご地域会議は、ちょうど10回目になります。高松市は大西市長を中心に、創造都市推進局を設置されて、産業文化の振興や都市の魅力を活かしたブランドイメージの構築に取り組んでおられるということで、今回10回目の地域会議を高松市で開催させていただくことになりました。

本日のプログラムの内容につきましては、既に資料でお配りしておりますので、割愛させていただきますが、有意義なシンポジウムにしたいと思っておりますので、最後までご清聴いただきますようよろしくお願いいたします。

ホストシティ代表挨拶

高松市副市長
勝又正秀氏

まずは、お詫びから申しあげたいと思います。今日はプログラムにも書いてあるとおり、市長の大西がこの創造都市の会議に出席する予定で、パネリストとしても、自分の思いを述べるつもりでございました。しかし、残念ながら、所用のため、出席ができませんので、代わりまして私から、一言、ご挨拶申しあげます。

本日の「生活文化創造都市推進事業高松地域会議」を、まさに地域の魅力を引き出す創造都市というテーマで、ここ高松で開催していただけますことを、主催の日本ファッション協会に心より感謝申しあげます。

また、本日は、お忙しい中、文化庁前長官の近藤誠一様、高松の創造都市推進審議会の会長をお願いしております佐々木雅幸先生をはじめとして、多くの皆さんにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

われわれは、昨年度から、市役所の中に「創造都市推進局」という組織を創りました。市役所の中に、創造都市を冠する局ができたのは初めてのことだそうです。日本の各地の都市が、これから少子高齢化が進み人口が減って、新たな産業を興していくにはなかなか難しい舵取りを迫られる中で、また、創造都市という旗印のもとに、文化芸術の力で地域を元気にしていこう、地域の活力を溢れさせて、これからのまちを元気にしていこうというテーマでまちづくりを進めている市町村が数多くある中で、創造都市推進局をつくって進めているのは、高松市が初めてだそうです。先行する自治体に比べれば、遅ればせながらではありますが、高松市も一生懸命取り組んでおります。

既にご存じだろうと思いますけれども、高松には文化芸術の伝統があります。さらに、盆栽、石材、漆器といった伝統工芸的なものづくりの歴史もありまして、昨今は特に、現代アートの瀬戸内国際芸術祭の舞台になったり、来年の3月には国際ピアノコンクールを開催したりと、非常に文化芸術の活動が活発なところでございます。

そうした地域の特性を活かして、かつそれから、後ほどのパネルディスカッションでご説明しますけれども、この美しい瀬戸内海や田園地域も広がる四国の自然を活かして、これからのまちづくりを進めていこうと、昨年、創造都市推進局をつくり、今まさに、その創造都市推進局の最初の仕事として、「創造都市推進ビジョン」の策定作業を終えようとしています。

こういった時期に、創造都市をテーマに高松を元気にしていこうという会議が開催されることは、本当にまさにぴったりのタイミングであろうかと思えます。この会議を契機に、参加の皆様にとってみても、創造性豊かな人生を送れ、そしてこの高松のまちが創造性豊かなまちとしてさらに発展していくことを、心より祈念するところでございます。

今日、明日とさまざまな会議や視察が予定されておりますが、どうぞ皆様にとってこの会議が実り多きものとなることを祈念いたしまして、開催地としてのご挨拶とさせていただきます。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。

第1部 基調講演

「創造性と地方都市の再興」

第2部 パネルディスカッション

「創造性と都市の魅力づくり」



第1部 基調講演

「創造性と地方都市の再興」

近藤 誠一氏
文化庁前長官



元気がない日本

私は、40年ほど前に大学を出て外務省に入りまして、38年半の間、外務省に席を置き、そのうちのちょうど半分、20年近くを海外で暮らしました。3年前に戻ってきて、文化庁の長官になりましたが、今年の7月8日に長官を辞めて、「ユウカン」になりました。新聞の夕刊ではなくて、有閑マダムの“有閑”です。少し暇ができたはずなのですが、実はそうでもなく、あちらこちらに引っ張り出されております。

本日は、創造都市ということでお話をさせていただきます。実はこの40年ほどの間、日本と外国の間を行ったり来たりしながら祖国日本を見てきたわけですが、特にバブルがはじけてからの20年ほどは、「どうも日本は元気がないな、一人ひとりの日本人を見ると、みんなそれぞれ才能はあるし、勤勉だが、どうも国全体として元気がない。一体どこがいけないのだろうか」とずっと考えてまいりました。

特に、文化庁に来てから確信に近い気持ちになったのですが、どうも日本は戦後、あまりにも経済成長一辺倒で、持てる資源のほとんどすべてを経済成長やインフラの整備に使ってきた。それが大成功して「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われ、一時は、世界第2の経済大国になりました。しかしそこで、頭を切り替えなければいけなかったのに、切り替えないままにずるずると来てしまったのではないかと思います。

安全保障や経済の繁栄というのは、人々が心の充実した幸せな生活を送りやすくするための環境整備だと思います。安全で豊かだからこそ、それぞれ好きなことができる。家族で楽しみ、友人と楽しみ、心豊かな生活を送れるわけですが、いつの間にか経済成長することが目的になってしまったような気がします。成功体験が、よく失敗の原因になると言いますが、それと同じようなことが、この戦後の日本にあるのではないかと感じます。

これだけ豊かになり、これだけ安全で清潔で、物事がすべてきちんと予定通りに動く、そういう国に居ながら、実は日本人はあまり幸せに感じていない。それは何故かということ、戦後の経済成長にあまりにも頼りすぎた社会の運営をしてきたがために、そうなってしまったのではないかと、そんなことを皮切りにお話させていただきたいと思います。

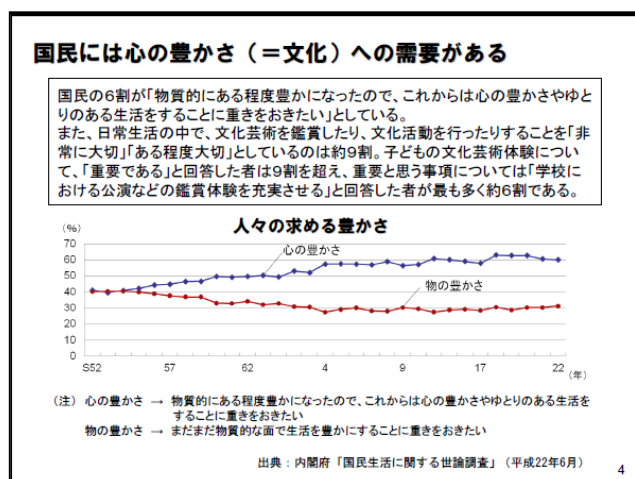
幸福度の低い日本人

まず、今、申しあげたことをデータで見えます。パリにある国際機関 OECD の事務局がつくったデータで、良い暮らし、あるいは国民が幸せに暮らしていける度合いをはかったものがあります。そこでは、例えば「所得・資産」では、日本は6位、アメリカが1位です。「教育」は、日本は2位、「安全」は当然ながら1位ということで、圧倒的にアメリカよりも、あるいは私が最後に居たデンマークよりも、はるかにいいランキングです。しかし、国民が生活に満足しているか、あるいは幸福度ということになると、日本は27位、21位と大変成績が悪くなってしまいます。

他にも国連の機関やメディアがさまざまなランキングを出していますが、これを見ても日本は全世界の国の中で、「人間らしい社会をつくっている」が「UNDP 2009」では10位、ニューズウィークというアメリカの雑誌が出した報告では9位、リーダーズダイジェストでは12位と、だいたい10位前後の地位を占めています。

しかし幸福度、国民が幸せに思っているかどうかになると、有名なレスター大学の教授の調査では、日本は世界のうちの半分くらいの90位であるとされています。先ほどの OECD という先進国だけの集まりの中でも、下位になっています。逆に自殺率でみると、国民一人当たりの自殺者の数が3番目に多いということで、どうも日本人は幸せだと思っていないということがデータから出てきます。データでは、特に主観をはかるのは難しいのですけれども、客観的に見た総合ランキングの日本の地位と、幸福度があまりにも離れすぎているということにお気づきいただければと思います。

問題は、なぜ日本人には幸福感がないのか、客観的なデータと主観のギャップはどこからくるのかということですが、日本人は働き蜂になってしまって、心の豊かさなんてどうでもいいのだという気持ちになってしまっているのかというと、決してそうではありません。内閣府の調査では、心の豊かさとももの豊かさのどちらに重きを置きますかという問いに対して、高度成長期は40%ずつ、ほぼ半ばしていましたが、次第に心の豊かさを求める人が増えています。特に、文化芸術を観賞した



り、文化芸術を行ったりすることは非常に大切だ、あるいはある程度大切だとする人が併せて 9 割、こどもに文化芸術を体験させることは重要であるという人も 9 割に上っています。この種の統計で 9 割というのは、大変大きな数字だと思います。言い換えれば、それだけ国民は、心の豊かさや文化芸術というものを求めているということだと思います。

文化への需要があるのに幸福でないということならば、供給が追い付かないのか、つまり文化資源のようなものが、日本になくて、国民の心が満たされないのかというと、そんなことは当然ありません。日本には、古くからの伝統文化、思想があります。日本は異民族による征服の歴史がなかっただけに、古来の素晴らしい思想、伝統文化が今も残っています。中国も、ヨーロッパも大変な文化大国ではありますが、異民族からの征服によって、古い、それ以前の民族の文化の多くが破壊されてしまいました。

日本は幸い、特に独自の自然観といった素晴らしい思想をずっと持ち続けてきました。素晴らしい人材が居ることも御案内のとおりで、毎年のようにクラシック音楽や建築で賞を取ったり、1 位になったり、オリンピックでも相当な活躍をしました。なでしこジャパンにも、素晴らしい人材がいる。文化財も本当に素晴らしいものがたくさん残っています。

文化芸術に対する需要と供給をつなぐシステムの不在

やはり国民は幸せを求めていますし、文化芸術によるもっと充実した生活を望んでいます。かつそれに見合う供給、人材もあれば文化遺産もある。それでは一体何が問題なのでしょう。需要があって、供給があればつながるとというのが経済学の論理ですね。必ず市場ができる。私の到達しつつある答えは、この需要と供給をつなぐシステムが不十分だということです。

例えば三つ星級のシェフが居たとします。それからおいしいものを食べたいグルメの人がいたとします。その二人の人を同じ部屋に招いて座らせても何も起こりませんね。必要なのは、素晴らしい厨房があり、調理器具があり、毎朝必ずマーケットに行き、フレッシュな野菜や魚を買ってくるシステムがあり、そしてしゃれたレストランがあって、季節ごとのメニューをつくってそれをお客さんにうまく宣伝をする、そういうシェフとお客さんをつなぐ一種のマネジメントといったものなのです。

文化についても全く同じことが言えて、素晴らしい才能を持つ人が居る、美しいものを見たいという人もいます。しかしそれをうまくつなぐシステムがない。音楽ホールや美術館が、その役割を果たすわけですが、それが極めて不十分であるということだと思います。そして、そういう文化芸術をゆっくり楽しむ仕組みがなく機会もないと、人間はどうしても、創造力、クリエイティビティといったものを発揮するチャンスがなくなってしまいます。言い換えれば、こどもが生まれ持っている才能を、十分に使い切ることができない。むしろ既存のシステムで、大人が常識というもので、こども達を押し込めてしまう。そういうこども達の創造性の芽を摘んでしまうということすら起きかねません。学校教育はなかなか難しい点がありますが、単に数学や歴史を教えているだけでは、人間の創造力、クリエイティビティは養われません。やはり文化芸術に接する場が十分でないといけないと思います。

ではそういったマネジメントと言いますか、需要と供給をつなぐことは誰がやったらいいのでしょうか。また、戦後、それが十分やられてこなかったとは、どういうことなのでしょう。

文化芸術の需要と供給をつなぐのは誰か

本来、誰がこのマネジメントをやらなければいけなかったのかという、いろいろな説があると思います。例えば、冒頭にも申し上げたように、放っておけば、いずれ需要があれば供給が追い付くということなのか、いやそうではなくて、やはり国が出ていかなければいけない、特に伝統文化というようなものは、とっつきにくいので、若い人はなかなか楽しもうとしないし、入口にすら入らない。だから国が支援をして、そういう機会をこども達に与えるべきだという議論もあると思います。

あるいは、これからは自治体の時代だから、政府は財政も苦しいし、地方がもっとやるべきだという議論もあるでしょう。いやお金を持っているのは企業なのだから、企業が営利目的でもいいし、メセナ活動でもいいので、企業こそもっとやるべきだという議論もあるでしょう。これからは NPO や個人が、もっとそういう役割を果たすべきだという議論もあると思います。冒頭のレストランに該当するような美術館、博物館、音楽ホール、そういったものが役割を強化すべきだという議論もあると思います。どれでなければいけないということではなく、国により、地域によって必要な役割が違ってくるのだと思います。

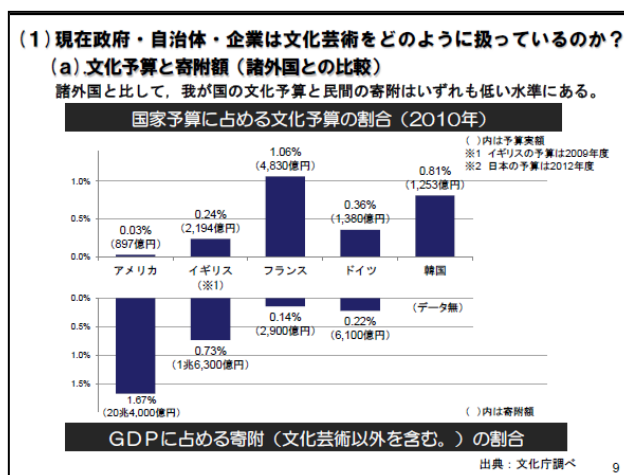
では、今の日本は一体どうなのだろうか、それぞれの主体がどういう役割を果たしているのかを見ていきたいと思います。まず国ですが、国家予算に占める文化予算の割合を見ると、フランスは予算の 1%以上を文化に使っています。韓国もそれに近く、今、どんどん伸びています。他方、アメリカやイギリスでは、文化芸術以外にも含みますけれども、GDP に占める寄附の割合が、アメリカは極めて大きく寄附文化の国と言えます。イギリスもそれに近い。最近少し変わってきましたが、基本的には文化は政府がやるものではなく、民間の財団やお金持ちに任せるべきだというのが、英米の主流の考え方ですから、それがこれにも反映しています。

日本はどちらだと思いますか？国が主導しているのか、それとも民間か。ちょっと残念ですけども、どちらでもないというのが今の日本の状況です。つまり国民が文化芸術による幸せを求めているのに、誰もそのつなぎの役割を十分に果たしていない。特に国もそうだし、民間も十分なことをしていないということですね。

自治体を見てみますと、地方自治体の文化関係経費は、基本的にはどんどん右肩下がりです。それから、いわゆるメセナ活動、企業が社会貢献、特に文化面に貢献する金額もリーマンショックの後、さらに下がっています。つまり、政府も自治体もそして企業も、十分な役割を果たせていないということだろうと思います。

その中で、個人はどのように文化を生活の中に取り込んでいるのでしょうか。OECD の先進国のデータで、一人ひとりがレジャーにどれくらい時間を使っているかという統計では、日本はメキシコに次いで、レジャーに費やす時間が短い。それから、睡眠時間も日本人は 2 番目に少ない。一番多いのはフランス人で、フランス人はよく寝ているということになります。

では、日本人は一生懸命働いているのかという、実は、そうでもないのです。実労働時間



を見ると、OECD 先進国の平均と日本はほとんど変わりません。日本人は睡眠時間を削り、レジャーの時間も削って、仕事もそんなにやっていない。では、一体何をしているのだろうかという問題があります。その答えをあらわすデータは実はないのですが、皆さんにお考えいただければと思います。

何故そんなことが戦後起こってしまったのかというと、冒頭申し上げましたように、経済優先主義で、そしてそれが成功したがゆえに、物質主義や効率主義が優先され、頭の切り替えができなかったからです。それがグローバル化によってますます競争が激しくなって、そちらの方に追いやられている。従って国であれ、自治体であれ企業であれ、国全体のレベルでのアートマネジメントが十分にできてこなかったのだろうと思います。個々の美術館や音楽ホールでは、それなりにやっているのかもしれませんが、国全体で国民が文化芸術の力を十分に味わえるよう、三つ星のものが食べられるようなシステムを誰も作ってこなかった。

文化芸術よりも経済的な利益を優先してきた日本

恐らく文化芸術が大事ですねと言えば、みんなそうですねとおっしゃいます。でも、目の前の経済的な利益を短期的に犠牲にしても、文化芸術に資源を費やすということはしてこなかったのだと思います。そのため、当然ながら文化芸術というものが、今ひとつ社会的な地位を確立できなかった。これは家庭においても、学校においても、職場、地域どこにおいてもそうだったと思います。日本の文化、あるいは伝統的な精神性、そういったものを十分に味わい、それを認識するチャンスがなかったのだろうと思います。その結果、文化芸術というものは、金持ちで暇がある人がやるものだというような認識になってしまった。従って個人の生活や国づくりに、本来文化芸術が持っている力が十分に活かされてこなかったのだと思います。

一昨年、3.11 の後、大変な自粛ムードになりましたね。こんな時期に歌舞音曲なんてとんでもないという感覚が広がりました。これはまさに日本人が、文化芸術にはすごい力があるのだということを、認識していなかったからだと思います。その後、やっと気がついて芸術家が現地に行って、チャリティコンサートをやり始めましたけれども、文化芸術が素晴らしい力を持っている、苦しい人に対して癒しの力もあり、希望を与える、夢を与える、生きていく力を与える素晴らしいパワーがあるのだということがわかっていれば、あんなに自粛をしないで、むしろどんどんチャリティコンサートをやり、お金を集め、みんなで気持ちを東北に届けようということになったのだと思います。ならなかったということは、やはり文化芸術の力に対する認識が、十分に定着していなかったということの、ある意味では証ではないかと思います。

以上が、私がざっとこの 40 年間、日本を観てきて感じていること、つまり日本人が経済では実力を発揮できたけれども、それが飽和点に達した後、どうも元気がない。その原因は文化芸術というものを、あまりにも軽視してきたということになるのだろうと思います。それではこれから一体、どのようにしていけばいいのかというその答えの一つが、実は今回のテーマである「創造都市」だろうと思っています。

なぜ、都市の時代か

まず、なぜこれからは都市の時代なのかということから入ります。日本はこれまで、戦後、あるいは明治維新以降、国が中心になり、中央集権体制で、東京一極集中で、軍隊のようなシステ

ムで力を発揮してきました。そのため明治以降、短い時間で世界の大国の一つとなり、戦後もわずか2、30年で第二の経済大国になるという成功を果たしました。しかし、今やそういう時代ではないのだということです。まず、国というのは人為的につくったものですから、ものごとを処理する上で中途半端な大きさだと思います。今の世界で防衛やテロ対策、環境問題という地球規模の問題を扱うには、国は小さすぎます。アメリカ、中国といった大国といえども、自国だけで防衛やテロ、環境問題に対応できません。どんな国でも小さすぎるわけですね。

他方、一人ひとりの国民の健康、医療、福祉といった毎日の関心事に、きめ細かく応えるには国は大きすぎます。官僚機構が肥大化していることもありますし、国は時代の変化に敏速に対応できません。シンガポールやデンマークといった小さい国は、比較的動きが早いですが、通常の国は意思決定に時間がかかるし、思い切ったことができません。また、グローバル化がどんどん進む中で、一人ひとりが異文化の侵入に直面をし、自分のアイデンティティがどこにあるのかを考えるようになります。そうすると、結局、国というより都市などのもっと小さなコミュニティ、自分が生まれ育ったコミュニティが自分の心の故郷になります。

都市にはそれぞれ歴史や伝説等に根差した固有の文化的価値があります。文化というのは、やはり地域から生まれるものだと思います。それが合わさって、日本の文化というものができるのであって、文化の発生はそれぞれの地域から、歴史と風土と伝説等の言い伝えから生まれてくるのだらうと思います。そしてそれが活性化することで、経済的な付加価値が出てくる。都市というのは、人間がその地域の独特の自然と一体になって、その独自性、固有性を持ちながら、みんなで連帯をして、そして力を発揮するのにちょうど手ごろなサイズなののだらうと思います。

特に文化芸術というものは、その地域に根差している、その地域の特徴を活かしたものが力を発揮するわけですから、都市には大中小あるとは思いますが、少なくとも国ではなく、小さな村も含めて、都市がこれからそこに住む人々の一人ひとりの力をフルに発揮させて、独自の力をもって活性化していく、人々を幸せにしていく単位になるのだらうと思います。

これから都市が文化芸術を使って活性化していく時代が来たのだということは、実はかなり前からヨーロッパを中心に言われてきました。名前は“文化芸術都市”や“創造都市”など、いろいろありますけれども、これまで世界にもさまざまな動きがありました。1990年代半ばは、欧州文化首都といって、ヨーロッパの中で毎年一つの都市を文化首都と決めて、地元はもちろん周りの国も協力して、文化でそのまちを栄えさせるという事業を始めました。

それが成功しているのを見て、ユネスコというパリにある国際機関、教育や文化を行う国際機関ですが、そこがそういう創造都市をネットワークで結ぶことで、例えば建築なら建築、デザインならデザインと、同じ分野の都市をネットワークで結ぶということを始めました。同様のことを、アセアンでも始め、そしてわが日本もやや遅ればせながら、文化庁が長官表彰という、がんばっているところを表彰する事業や、アイデアをもっているところに若干の助成金をつけて、それを奨励するというモデル事業を始めました。

こうした動きをする上で、今日もいらしている佐々木雅幸先生が、大変なお力を発揮され、文化庁も佐々木先生のご指導のもとに、こういった表彰や支援事業を始めたわけです。これまで長官表彰や、モデル事業で採択された都市もかなりの数に上っております。そしてこうした都市がネットワークで結ばれています。今年のはじめ、佐々木先生のご指導のもと、「CCNJ—創造都市ネットワーク日本」というものができました。当時60いくつありましたから、今はもっと増えて

いるかもしれませんが、それくらいの数の日本中の都市が、これからは文化芸術で生きていくのが一番よいようだと、大きな工場を誘致するのではなく、文化芸術で魅力を出せば、若い人も大都会から戻ってくるという発想で、ネットワークに次々と入っています。横浜市から群馬県の中条町まで、大小併せて入ってきています。

しかしながら、本当にそれでうまくいくのかという疑問があると思います。後ほど、パネルディスカッションでも話題になると思いますが、ヨーロッパのまちが思い切った文化への転換によって、思いきった予算を注ぎ込み、産業革命で成功したものの、その後廃墟と化したまちを文化で再活性化させたという例が、相次いでおります。

文化芸術創造都市で成功する五つの要件

今日の、この後のディスカッションの大きなテーマになる、高松市がどうやって文化創造都市として発展していくのか、どうやってその力を最大限に発揮できるのかを考えていく上で、いろいろな要素があると思いますが、私なりに5つ程に整理しました。これは先ほどご紹介しましたように、いろいろな学者あるいは研究者が本を書いておりますが、その中から私として納得のいくものを選んだものです。

まず、リーダーの先進性。これは市長さんであれ、あるいは知事さんでもいいと思いますが、

リーダーに先進性があり、これからは文化芸術でいくのだという、市民の方々に、あるいは議会にやや迷いがあるかもしれないけれども、これからは文化なのだということをしっかりと認識をして引っ張っていくというリーダーが必要だということです。当然ながら市民の方々がそのことを理解し、かつ自らそれに関与し、協力していくことが必要です。

それから文化芸術を旗印に大きく発展するには、才能のある芸術監督のような推進者が必要だろうと思います。市長さんは芸術のことばかりやっているわけにはいきません。芸術で都市を栄えさせることを任せられるような、才能のある芸術監督的な人がいなければいけないと思います。

さらに他の都市との競争になりますから、他の都市にはない、あるいは自分の都市、地域だけの独特のもの、特性を自ら見つけ出すということが必要でしょう。リーダーの先進性と才能ある推進者、リーダーの中には文化芸術の才能のある方もいらっしゃいます。しかし芸術家というのは、ある意味ではちょっと変わった人が多いですね。常識から外れた人こそが必要なのです。今の日本は、常識でがんじがらめになってしまっていて、これまでの習慣、慣習からなかなか抜けられません。それをぶち破ることができるのが、芸術の力であり、それができる人が芸術家なわけです。ですから芸術家というものが、やはりこの文化創造都市のリーダーになってほしい。しかし行政には、それ以外にも教育もあれば福祉もあればいろいろあるでしょう。ですから芸術家が、先進性のあるリーダーになればいいとは限りません。行政には行政のやらなければいけないことがあります。従って、一人の人が両方を兼ねる、つまり市長さんが芸術家であるというのはうまくいかないかもしれない。やはりそこは役割分担で、全体を見てリーダーシップを総合的にとつ

(3) 文化芸術創造都市で成功する要件

- リーダーの先進性
- 市民の理解と協力
- 才能ある推進者
- 地域の特性を見つける
- 寛容性

20

ていくリーダーと、その信頼を受けながら、芸術面でかなり思い切ったことができる人との組み合わせが必要だろうと思います。

2 番目の市民の理解と協力ということと、地域の特性ということを両方併せて考えれば、今日のテーマは「生活文化創造都市」となっていますが、市民が納得がいくまちづくりのためには、生活文化に根差しているということが必要だろうと思います。現代アートの極めて先鋭的なものを持ってきて成功しているところもありますけれども、やはり文化というものは地域から生まれてくるものです。生活文化から生まれてくる、そこから見出される自分のまちの特徴といったものを見つけていく必要があるということだと思います。

最後の寛容性とは何かと思われるかもしれませんが、新しいことをやるわけですし、これまでの常識とは違うことを思い切ってやるということですから、市民の方々がそういうものを受け入れて許容する心の広さ、おおらかさといったものが必要だろうと思います。特に、文化芸術家には、通常の常識からちょっと外れた方も少なくないし、ましてこれから外国のアーティストがどんどん入ってきます。そしていろいろな議論もし、日本の地元のアーティストとインスピレーションを交換しながら、いろいろなアイデアを交換していくとなると、やはりまちを歩いていて、ちょっと肌の色が違う人、髪の毛の色が違う人も増えてくるでしょう。そういうときに、これでまちは活性化する、多様性を懐に取り込んでそれによって大きく飛躍するのだという長い目で観ていただくということが必要です。それがここで寛容性と呼んでいることです。

高松市でも、異業種交流の場というものをつくろうとしているようですけれども、異なるものが混ざり合うところに新しいエネルギーが生まれ、新しいアイデアが生まれてくるのだと思います。日本人はどうしても狭い自分の蛸壺に入り、同じ仲間と仲良く暮らすことで安心して平和に暮らすことに傾きがちですが、今の時代はそういうことではなく、異なる業種、異なる文化、異なる言語の人と積極的に交わることで、新しい刺激を得る、自分で何か新しいことを考えるようになる。そういうことを積極的にやっていかなければいけない時代でもあるわけです。そのためには、基本的には寛容性あるいは好奇心といったものがなければいけないと思います。

文化芸術が持つさまざまな力を活かす

最後に、今後何をしたらいいのか、日本全体として何をしたらいいのかということになりますと、文化芸術にはさまざまな力があります。自分の気持ちを表現する、相手の気持ちを理解する、そして一緒に共通の目的をもってコラボレーションしていくことをさせてくれる能力が、文化芸術にはあると思います。

クラスでも算数だけですと、点数を争う、あいつよりも5点よかったとか、勝った負けたということになると思います。しかし文化芸術はそれぞれ一人ひとりに才能があり、簡単に数字で採点ができません。なんとかちゃんは絵がうまい、〇〇くんは歌がうまいというように、一人ひとりがのびのびと生活ができる、一人ひとりの存在価値がクラス全体に広がっていくということで、落ちこぼれやいじめは当然減ってくると思います。

そういった力で社会全体が連帯を強め、社会が力を得ていくということもあります。それから通常の学科の試験でいい点は取れないけれども、実は素晴らしい才能がある、あるいは何らかの形で心または体に障害のある方も、大変な能力を芸術面では発揮できるわけですね。これから少子高齢化で人口が減っていく中で、大事なことは一人ひとりに持てる力を存分に発揮してもら

こと、それがこれからの日本には一番必要だと思います。

地域の伝統を活かした創造都市の連携が必要

そのためには、今までの教育システム、社会システムでは、中心にきて活躍できなかった方々の能力をうまく引き出し、一人ひとりがその能力を発揮することで、全体としての国の力がさらに発展できるようになると思います。それに貢献するのが、文化芸術だろうと思います。従ってそれを実現するために、この文化に対する需要と供給のマッチング、いろいろなつなぐシステムをつくっていかねばいけません。国全体のレベルでのアートマネジメントが必要だということです。それは中央政府だけではできません。大きすぎるし、財政の負担も大きいのです。自治体やより小さい組織が公的なものであれ、私的なものであれ、よりきめ細かくその地域地域に合った活動をしていくということが必要になってくると思います。

つまりそれぞれの地域の伝統を活かした創造都市というものができ、そしてそれがただ孤立しているのではなく、ネットワークとして結びつくことによって、日本国内のみならず、ユネスコのネットワークもありますが、そういうところと結びついて、志を同じくする都市がつながっていくことでお互いに学び合い、そういうことが可能になる。それが、これから日本が再生し、一人ひとりが充実感を覚え、幸福度も増し、日本が再び力が存分に発揮できる素晴らしい国になっていく大きな鍵になると思います。

そういう流れが、今、日本でじわじわと始まっています。私も3年前にデンマークから帰ってくるときに、こういうヨーロッパの動きを知って、日本ももっとやったらいいのにと、地方主権と言いながら、なかなか思うように動けない中で、文化芸術の力で都市が自ら主導して活性化していくことこそが、日本のこれからの道だろうと思って帰ってきたところ、佐々木先生を中心にすでにそういう動きが始まっていたということで、大変心強く思った次第です。

それがこの3年間でさらに進みました。今、何をするにも非常に難しい、がんじがらめの社会になっている日本ですけれども、創造都市、文化創造都市の芽がどんどん育ち、幹が育っています。3年間でこれだけ、物事がいい方向に動いている例は、私のみる限りでは、ほかにあまりないと思います。

佐々木先生はじめ、文化庁の長官表彰やモデル事業に採択された各都道府県や市町村の首長さん、あるいはNPOの方々等の努力がだんだん実り、それが横につながりつつある。大変心強い流れができつつあると思います。これをさらに確かにするということ、そして高松市もそれに積極的に参加をしていただくということが、これからの高松市のみならず四国全体、あるいは日本全体を活気づけ、日本人がそれぞれ、日本人に生まれてよかったと思うような国になる、その大きな鍵を握るのではないかと思います。

今日のシンポジウムのイントロダクションとして、話題のタネとして以上のことをお話ししました。ご清聴ありがとうございました。

以上

第2部 パネルディスカッション

創造性と都市の魅力づくり



佐々木 みなさん、こんにちは。一昨日、イタリアのボローニャから戻ってきたところです。先ほど近藤前長官がお話になりました、ユネスコが進めております創造都市ネットワークの世界会議が、今年の9月にボローニャで開催されまして、日本の現在の参加都市、金沢市、神戸市、名古屋市と新たに参加を目指し現在申請中の札幌市、浜松市の代表者の方と現地に行っておりました。

これからさらに、現在、全世界で申請中の40~50の都市が加わりまして、80~90ぐらいの都市がこのネットワークに参加するという方向になってきます。そこで、日本としましては、金沢市が2015年に世界会議を招致したいという申し出を行いましたところ、満場一致で決まりましたので、2015年には金沢に世界の創造都市ネットワークの代表者が集まるということになると思います。ちょうど、北陸新幹線が金沢まで延伸されますので、非常に便利になるということもありまして、ぜひ皆様方もその機会には金沢に駆けつけていただきたいと思っています。

ボローニャというまちは、世界最古の大学のあるまちです。日本の大学は150年ぐらいの歴史が一番古いものですが、ボローニャ大学には900年を超える歴史があります。1988年に、900年祭を記念して、世界の大学の学長さん750名が集まって「大学マグナカルタ」に署名しましたが、今年行われたその25周年式典にも参列しました。

そこで「創造都市と大学」について話すようにと言われてまして、世界の学長さんを相手に短時間ですけれども、話をさせてもらいました。そのとき私が申ししたのは、創造都市というのは、先ほどの近藤さんのお話にもあったように、21世紀の都市のあり方のうちの非常に注目されているものでありますが、創造性を都市全体に広げる上で、大学の持っている力が非常に大きな役割を果たすということです。リチャード・フロリダという学者は、大学こそは、創造的なハブであ

ると言います。「ハブ」というのは、ハブ空港の「ハブ」ですね、その地域にいろいろな影響力を持ちます。それほど重要な役割なのですが、大学から出た人がその地域に留まって、創造的な仕事をするためには、大学だけではいけなくて、先ほどのお話にあったように、周りのコミュニティに寛容性がなければいけない。クリエイティブな人たちが将来もそこで、その地域に住み続けて、さまざまな新しいライフスタイルや新しい産業や新しい技術を生み出していく、創造的な環境をコミュニティが準備しなければいけないということを申しました。

私は改めて今日、この高松に参りまして、高松がこれから21世紀の日本や世界を代表する創造都市に変わっていくには、どういった条件が必要なのかということをお話したいと思っています。

今日の4人のパネリストの方々は、いずれもその面では大変に重要な役割をお持ちであります。まず、高松市の創造都市推進ビジョンがほぼまとまりつつあり、まもなくパブリックコメントにかかろうかという段階にあります。皆さん方に広くご意見をいただいて、最終的にまとめあげ、11月くらいには、おそらくキックオフのイベントがあるだろうと思われれます。そのほやほやのところを勝又副市長にお話いただけるということです。

それから今や、日本あるいは世界を代表する非常に大きなアートイベントに成長しつつある「瀬戸内国際芸術祭」が、今年、春、夏と開催されまして、また秋のシーズンが始まろうとしています。瀬戸内の自然を再生するという非常に大きな事業を、アートでやろうという大胆な試みですが、この祭りがいいのはボランティアが先頭に立っていることで、そのまさに先頭に立っている甘利さんにお話いただきます。

さらに瀬戸内も広いですね。小豆島もこの芸術祭に参加しています。小豆島を代表して柳生さんに来ていただきました。また、芸術祭の前身としては、新潟県越後妻有で行われた「大地の芸術祭」がありますし、新潟市でも「水と土の芸術祭」を展開してきました。新潟市の中央区長の高橋さんにもお越しいただいています。これから私もわくわくするような議論が起きるのだろうと思っています。お集まりの皆さんと一緒に議論を楽しみたいと思っておりますので、どうぞ、よろしく願いいたします。それでは、まず勝又さんからお願いいたします。

勝又 それでは高松の「創造都市推進ビジョン」作成の動きと、具体的にこんなことをやっていきたいということについて、ご説明させていただきたいと思います。

「創造都市推進ビジョン」は、今、佐々木先生がおっしゃったように、市民の皆さんのご意見をいただくパブリックコメントの手続きに入ろうとしています。冒頭の挨拶の中でも申し上げましたが、昨年2012年の4月から、市役所の中に「創造都市推進局」という担当の組織をつくって、佐々木先生に創造都市推進審議会の会長をお願いし、去年の9月からまる1年ほど、この議論を進めてまいりました。



まず、「高松市創造都市推進ビジョン」のロゴを御紹介します。創造都市をイメージするように、創造都市高松の真ん中に灯台があって、その灯台が創造都市高松を照らしているというイメージでつくりました。



市長が言うには、創造都市というのは、これから少子高齢化が進み、高松も今、人口 42 万人のまちですけれども、2050 年には 31 万 2000 人くらいになり、10 万人ほど減るとい将来推計なのですが、そんな中でも持続可能なまちにしていきたい。持続可能なまちは、将来に希望の灯りが見えるようなまちでなければいけない。それをこの灯台から照らすような、そういったまちにしたいということです。

近藤前長官がお見えになっておりますけれども、今年の 7 月に富士山が世界文化遺産に登録されました。9 月には 2020 年の東京オリンピックの開催が決まりました。これから少子高齢化が進んで、日本全体に成長余力がないと言われる中で、やはり将来に灯りをともすような国にしなければいけない、この高松も創造都市として灯台の灯りがともるようなまちにしたいという意味で、この「創造都市高松」というロゴをつくりました。

次に、高松らしい田園都市とはなんだろうということで、いろいろな人が創造都市の取組みを進めている中で、高松の特徴というのは、四国の中核拠点都市として、ある程度一定のインフラを集積した便利な都市的な利便性のあるまちではありますが、瀬戸内海の非常に美しい海とそれから四国の穏やかな自然、四国山地の山なみがあるような潤いのある、田園の穏やかさが都市的利便性とともて享受でき、その中で市民が芸術文化の活動を花開かせて、それによって街全体が元気になって持続可能性のあるまちとして発展していく。そういうイメージを絵にしました。この中には、玉藻公園の高松のお城の櫓があったり、サンポート高松の都市的な新しく再開発されたエリアに赤灯台がともったり、そして海には船が浮かんでいるというイメージの絵です。これはあくまでもイメージでありまして、具体的に何をやるかが重要になってきます。



ビジョンづくりの推進体制としては、先ほど来申し上げているように、創造都市推進審議会をつくりました。役所で新しいものをつくる際には、有識者の皆様、各界の皆様のご意見を伺いながらつくっていかねばなりません。この審議会の会長を佐々木先生にお願いしたわけですが、その下に40歳以下の組織として「高松市創造都市推進懇談会(U-40)」を設置しました。どうしてもこの手の審議会をやる、市内の各界の代表者を中心にとということになり、平均年齢が高くなります。それに対して柔軟な提案をしていこうということで、参加者を40歳以下に限定した懇談会です。甘利さんもこの「U-40(アンダー40)」のメンバーです。審議会は玉藻公園の披雲閣など高松を代表するようなところで、将来の高松を考える議論を進めてまいりましたが、U-40は、若い人たちがざっくばらんにアイデアを出し合うような体制で議論を進めて、このビジョンの案をつくっていきました。

創造都市は、全体的なイメージがわかりづらいと言われますが、創造的な文化芸術、伝統芸能、あるいはスポーツ、あるいは工芸等を、いろいろな分野、商工業の振興、まちづくり、農林水産業の振興、観光の振興等に広げることによって、魅力あふれ、活力ある創造都市にしようというイメージを描いております。あくまで核となるのは、創造的な市民の活動である文化芸術、あるいは工芸、スポーツ、伝統芸能ですけれども、ここから派生して街全体を元気にしていこう、その行く着くところが「創造性豊かな海園、田園、人間都市の実現」ということです。「海園」という言葉はあまり聞かないと思いますけれども、これは市長の大西の造語で、田園、それから瀬戸内海の内海によって人間らしい暮らしができるまち、これを実現していこうというのが、我々のビジョンであります。

その推進のイメージとして、独創指向、世界指向、未来指向の3つの戦略を進めていこうということを出しています。先ほど来申し上げている通り、高松らしさがないと同じ創造都市でも発信力がないですし、生き残っていけない。そのためには地域だけを見てはいけなく、世界全体を見てグローバルに開く考え方でなければいけない。そしてその先にある、将来を見通した独創・世界・未来指向で、文化芸術の持つ力を街全体の活力に繋げる創造都市を進めていこうという戦略であります。

これがビジョンの基本的な考え方で、それにぶら下がっている、実際に何をやるかということが大切だと思います。アンダー40や審議会の中で、いろいろ議論していただいて、6つの分野でさまざまなことをやっていこうと考えています。

具体的には、「交流空間」「食」「生活工芸」「祝祭」「国際会議」それから「こども」という6つの分野で括り、創造都市を実現するためのプロジェクトとして43の事業を掲げております。



例として紹介させていただきますと、「交流空間」では、高松の方はご存知かと思いますが、中心部でこどもの数が減って小学校の統合を行いました。高松出身の文豪・菊池寛の出身校である四番丁小学校が市役所のすぐ裏にありましたけれども、他の二つの小学校と統合されて新番丁小学校に移り、跡地を活用して創造支援センターという、新産業をつくる起業を支援する小さなオフィス、インキュベータールームをつくりました。そこに埋蔵文化財センターと、NPOの市民活動センター、地域のコミュニティセンターとを同居させることによって、地域の皆様と一緒に新たな創造的な産業も含めた起業を支援していこうとしております。

「瀬戸内生活工芸祭」は、今日会場にお見えになっております三井さんに相当ご尽力いただいて、去年開催しました。高松を代表する工芸である漆器、石材のほか、工芸とは言えないかもしれませんが、盆栽などといった伝統的な工芸を集めて展示するもので、高松のものだけではなく、全国のものも集めて展示し、来年また開催する予定でおります。

国際芸術祭については後ほどお話があるかと思いますが、国際会議として来年、日仏の自治体交流会議を開催いたします。第1回はフランス、第2回は日本、第3回はフランス、第4回日本という形で2年おきに4回目の開催になるのですけれども、日本では以前、金沢で開催され、今度は高松で開催されます。これによって国際交流も進めてまいります。

特徴的なものとしては、これからご紹介させていただく、「こども」があります。将来を担うこどもたちが、この高松で創造的な活動をして大きく明るく育っていく、それがまちの活性化につながるということで、こどもに関する事業を創造都市の活動の中に入れております。これからの高松を担うこどもたちを地域全体で育むことで、創造性を発揮できるこどもに育ていく。これによってまちの将来の明るさ、活気もたらされるということで、具体的な取り組み事業として、「芸術士派遣事業」「地域密着型トップスポーツチームの活用」「ものづくりふれあい教室事業」を掲げています。

芸術士派遣事業は、高松が独自に取り組んでいるもので、芸術士という資格があるわけではありません。これは高松オリジナルの言葉です。保育士さんではなく芸術士さんを、保育所や最近はこども園、幼稚園などに派遣します。若い芸術家の卵、芸術家のさまざまな分野、絵や彫刻、デザインといった分野で芸術的な才能を発揮する表現者、作家さんたちをNPOのアーキペラゴというところから派遣していただいて、こども達に芸術的センスを育んでもらおうという事業です。

また、全国レベルではないのですけれども、スポーツチーム、バスケットボール、野球、サッカーの地域密着型のトップチームがありますので、そういったものをこども達に見てもらおうといった事業も進めております。

それから「もっともっと創造プロジェクト」という分野を設定し、新しい事業として「瀬戸内メディアアート祭」の開催や、サテライトオフィスを山間部・島しょ部に誘致していこうといった事業もビジョンの中に取り込んで、文化芸術の力でこのまちを活性化していこうという取り組みを始めたところです。

今日、お配りした資料の中に「紺屋町カフェ」という資料が入っているかと思いますが。高松のまちで、「創造都市」という旗印のもとでさまざまな活動に取り組んでいます。うまくいくこともあれば、なかなかうまくいかないこともあるかと思いますが。トライアンドエラーで、失敗を恐れずに社会実験的にやっていこうということで進めております。「紺屋町カフェ」は、今日の会

場であります、この高松市美術館の右奥のスペースにあるカフェで、以前営業していたのですが、なかなかうまく定着しませんでした。事業者の問題なのか、場所が今一つマッチしていないのか、利益が上がらずに、しばらく閉鎖されていました。せつかくの美術館のカフェのスペースなのに閉鎖されていたわけです。美術館という文化芸術の一番の拠点ですので、そこに「U-40」の人たちのアイデアで、漆器や庵治石などの高松独自の工芸品を展示販売するのとセットで、若い人たちがいろいろなテーマで講演をするカフェを復活させてみようというプロジェクトです。この10月と11月の間、試験的に実施しますが、新たな創造都市の拠点、文化芸術の拠点として美術館のカフェのスペースが再生していくということを念頭に入れております。こういったさまざまな取り組みを通じて、将来的に高松のまちを元気にしていこうとがんばっております。

雑駁になってしまいましたが、創造都市推進ビジョンの説明をさせていただきました。どうもありがとうございました。

佐々木 今、お話がありました「紺屋町カフェ」が、本日限定でオープンしておりますが、なかなかよい雰囲気になっていました。創造都市は、クリエイティブな対話の中で発展しますので、カフェ、サロンは非常に大事です。これをうまく成功させてほしいと思っています。

では、甘利さん、「U-40」の活動や瀬戸内国際芸術祭におけるこえび隊の活動についてお話しください。

甘利 みなさん、こんにちは、甘利と申します。私は、こえび隊の事務局として「U-40」に入らせていただいて、初めて行ったときに、盆栽の方もいらっしゃれば、石材の方もいらっしゃるのですが、すごく活気のある会だったので、とてもびっくりしました。もちろん堅い会議ではなく、笑いや冗談が飛び交う、そんな会議です。そこで出てくるアイデアもとてもおもしろいものでした。そういうお仲間に入れたのは非常にうれしかったですし、それを立ち上げた高松市さんに本当に感謝しています。

今日は、瀬戸内国際芸術祭に、ボランティアのこえび隊というサポーターグループがいるのですが、その話をしていきます。

瀬戸内国際芸術祭は、2010年から始まって、今年、2回目になります。2010年の第1回目のときは93万人の方にいらしていただき、非常に成功しました。「海の復権」がテーマですが、アート、建築、交流、子どもたち、民俗、世界の叡智が集う場所をつくるなど、いろいろコンセプトがありまして、合言葉は「島のおじいちゃんとおばあちゃんの笑顔が見たい」です。島にいろいろな人が行って、そこで交流をすることで地域のあり方を考えようということが、芸術祭の根底に流れています。ポスターは、デザイナーの原研哉さんのデザインで、春、夏、秋の旗がはためくデザインになっています。今は秋になっているので、夏のバージョンから秋のバージョンに貼り替えている最中です。

今年は、ポスターにもあるとおり、春、夏、秋の3シーズンに分けて開催しています。2010年のときの大きな反省として、105日間夏から秋にかけて開催したのですが、非常に多くのお客様が来てしまい、島の方に迷惑をかけてしまった部分がありました。なるべくお客様に分散して来ていただく、そしてお客様にもゆっくり島を巡っていただきたいということで、今年は3シーズンに分けました。参加アーティストは、24の国と地域から約210組あります。今から全部の説明

はできませんが、島にどんな作品があるかを駆け足で説明していきたいと思います。

会場は、西は伊吹島から東は小豆島まで、12島あります。ここはいわゆる備讃瀬戸と呼ばれる地域で、2010年のときは7島だったのですが、今年は西の島5島も参加して12島になりました。

基点になるところは直島です。世界でもアートの島として非常に有名になっています。ここにある地中美術館は安藤忠雄さんの設計です。瀬戸内国際芸術祭の

主催は香川県ですが、福武財団、ベネッセホールディングスと各市町村も協力しています。私たちこえび隊は、それを民間で支える組織です。

20年前から直島で、福武財団の方たちがアートによる地域づくりをしたことが、この芸術祭のきっかけになっています。大竹伸朗さんの「直島銭湯」という実際にお風呂に入れるアートや、今年できた ANDO MUSEUM という安藤忠雄さんの個人美術館もあります。

2010年のときから始まった豊島のアート活動では、豊島美術館という西沢立衛さんと内藤礼さんの作品があります。中に入ると穴が開いていて、下にただ水が流れている作品です。内藤礼さんは、最初、この美術館の模型をみたときに、まさか穴は開かないだろう、ガラスなどで覆うのだろうと思っていたのですが、最後まで屋根がつかないままの作品になりました。この作品は本当に人気があり、老若男女を問わず外国の方も、水が動いているだけなのに、なぜこんなにじっと見てしまうのだろうというくらい人気があります。今年は、豊島横尾館という新しい作品も登場しました。アーティストの横尾忠則さんの美術館です。

2010年のときに、みんなでがんばってつくったのが「島キッチン」です。豊島の唐櫃（からと）の岡にレストランをつくりました。元々お豆腐屋さんだった空き家を改装してレストランにしましたが、この作品は、この3年間で世界で4つの賞を取りました。新しい空き家の利用の仕方ということで、建築界でも評価されています。今もレストランは営業しています。ここでは、地域のお母さんたちが料理を作っています。ただ、地域のお母さんたちだけでは地元の料理になってしまうので、丸の内ホテルからシェフをお呼びして、メニューを考えるなど新しいサービスを考えながらクオリティを保っているのと、豊島で採れた野菜や魚、お米など、ほぼ80~90%は豊島産の素材を使って、食事を提供しています。

女木島では愛知県立芸術大学が、この4年間活動しています。また、大竹伸朗さんの作品が女木島の小学校にあります。今年夏に開催したムーミンの劇は、世界から14人の子供たちがやってきて2週間キャンプをしてつくりました。

男木島の港にある交流館は、ジャウメ・プレンサさんの2010年の作品ですが、2011年にここで結婚式が開かれ、大西市長が仲人をなさいました。2010年の芸術祭のときに、ここをお客様として訪れたカップルが、こんなところで結婚式ができたらいいねと冗談まじりで言っていたことが、高松市さん経由でお話があって、こえび隊が総出で、本当に手作りだったのですが、温かい



結婚式をつくりました。これが初めての結婚式で、今年さらに二組結婚式が行われて、結婚式場としても活かされています。

島の方がよく使っている「オンバ(乳母車)」がありますが、それにカラフルな装飾を施し、アートに変えた“使えるアート”もあります。

男木島の小中学校は、2010年には3人の生徒さんが居たのですが、2011年の3月に卒業してしまいました。その後、休校ということになり、使われていなかったのですが、今年の芸術祭で「昭和40年会」という、日本



でも元気なアーティストの方たちが6人、この学校に入って、作品を展開しました。来春、こども達が11名戻ってきて、もしかしたら学校が再開されるかもしれないという奇跡的なことが起こりつつあります。元々、こども達が戻ってくるくらい楽しいアートをつくらうということがテーマだったので、それが本当になったということでびっくりしました。

小豆島も今年は、大変多くの作品が展開されています。ワン・ウエンチーさんの作品は、2010年のときも大人気だったのですが、今年も「小豆島の光」という作品を、台湾から14人の竹職人の方が来て作りました。

土庄の本町というところにある「目」というアーティストが作った「迷路のまち」もあります。これは“迷路のまち”の中に迷路の家をつくるという作品で、中に入るといろいろなところにドアがあったり、箆笥の中から出られたりします。NHKの全国放送に取り上げられるなど、いろいろ話題になった非常におもしろい作品です。また、小豆島の北東部の福田という地区にある廃校を、アジアのプラットホームにしようと、アジアのアート関係のNPOや財団などの組織が集まって作品をつくりました。アジアから来ている人達がみなシェフを連れてきて、それぞれのアジア料理を地元の人に教えて、地元の人が料理を提供しています。話題になっているビートたけしさんの作品も小豆島にあります。

大島の活動も活発化しています。私たちは2009年から関わっているのですが、2007年くらいからアーティストがこの島に通い続けています。国立療養所大島青松園で入所者の方々と交流を深めながら活動しています。大島青松園の“{つながりの家} カフェ・シヨル”では、大島を丸ごと味わっていただこうと、入所者の方が代々受け継いでいる野菜や果樹園があるのですが、そこで採れた野菜などを使った料理を提供しています。このカフェが出来る前は、入所者の方に会ってお話したり交流したりすることは全くなかったのですが、この場があることで、新たなコミュニケーションが生まれました。このカフェに来ることを楽しみにしている入所者の方もいらっしゃいますし、わざわざこのカフェに行きたいと、大島に人が渡っていくということが起こっています。

わたしたちこえび隊も大島に関しては、2010年の会期後も、月に2回、土日が開館日になるので、ガイドを行ってきました。大島の歴史、ハンセン病の歴史をいろいろな人に伝えていこうと、2年間ずっとガイドを続けています。会期中は毎日ガイドを行っているのですが、今年、大島のあり方を考える会が発足し、その中にこえび隊のメンバーも入らせていただいています。そのメ

ンバーは女性なのですが、2009年からずっと大島に通って、仕事をしながらこえび隊の活動をしていました。今年から、ボランティアではなく正式スタッフとして事務局に詰めています。

西の島でも作品を展開しています。沙弥島には、話題になった五十嵐 靖晃さんの「そらあみ」という作品があります。いりこで有名な伊吹島にも、5万個の浮きでつくった、豊福亮+Chiba Art Schoolの作品もあります。伊吹島だけでなく、観音寺市の住民全員が参加したのではないかといい、みんなで作った作品です。これも小学校を利用して展示しています。

本島では、シーボルトガーデンをつくり、高見島には野村さんの「海のテラス」があります。粟島の海員養成学校では、日比野克彦さんが作品をつくっています。今は、西の島のいろいろなところでいろいろな作品をつくっています。

宇野では、アラーキーこと、荒木経惟さんが写真の作品を展開したり、こえび隊がこへび隊とわらで機関車をつくったり、高松市内の屋島では、レアンドロ・エルリッヒという作家が、山上駅を使ってアートを展開しています。

今年の夏に、とても話題になった「ベンガル島」には、みなさん行かれた方も多いのではないかと思いますが、バングラデシュの人たち、訪問者も含めて100人くらいが、夏に高松港に集って村を開きました。後半になるにつれ、すごく活気が出てきて、話題騒然といった感じになりました。皆さんがベンガル語を話すので、こえび隊もベンガル語講座を開いて、お客さんとバングラデシュの方をつなぐ橋渡しもしました。

10月14日には「現代源平屋島合戦」が高松市で開催されます。2012年に、プレ開催をし、今年は本番ということで、すごく力が入っています。赤と白に分かれて、パレードを行ったり運動会をしたりするのですが、全体的には源平がテーマの大きなイベントになるはずなので、ぜひ皆さん来てください。

こえび隊は芸術祭のほぼすべての活動に参加しています。作品づくりのお手伝いもしますし、こえび隊がメインでイベントをやることもあります。2009年の10月、1回目の芸術祭の前年に発足しました。メールの登録者数でいうと、今、4800人が登録しています。日本だけではなく世界中から来ています。今年だと、香港、パリ、アメリカ、ニューヨークなど、いろいろなところから来て来ています。年齢や職業の制限もなく、1日から参加可能ということで呼びかけています。

なにをしているかという、例えば島の行事に参加します。島には40代、50代の人たちが少なくなっていて、若手と言われるのが60代なのですね。その中で、お祭りや行事を続けるのはかなり厳しい状況です。女木島や男木島には小学校はあるのですが、生徒さんがいない。でも地元の人がやりたいと言っているのが運動会なのです。運動会の選手宣誓はやはり若者がいいと、こえび隊が駆り出されるなど、こえび隊の役割が少しずつ増えてきています。高見島の合同運動会



は、大変盛り上がりました。もうひと盛り上がりしたいということになると、こえび隊がグラウンドの真ん中に走り出て盛り上がるような何かをするわけですね。盛り上げ役として、いろいろな島で活躍しています。現場活動だけではなく、3年間ずっとやっている人もいれば、1週間前から始めたという人もいますので、ミーティングを行って情報交換しながらやっています。

ガイドチームは30代から60代くらいまでの女性10人ほどのメンバーが、毎週土曜日の夜に集まって、勉強会を開いています。島の歴史も含めてアートの勉強もしながら、どういふふうにしたら、お客さんに芸術祭を伝えることができるかを研究しています。もちろん作品の制作もします。地元のおじいちゃん、おばあちゃんと話をしながら作業をしています。寮があって、そこに泊まりながらやっています。

こうしていろいろな人が集まることによって、草の根ネットワークが広がっています。この活動を高松でやれているということが、非常にうれしいと思っています。みんなここに「ただいま」と言って帰ってくるのがすごくうれしくて、高松でこういうことができ、それが芸術祭につながって、それがまた高松に還元できるということが、私たちにとってはとてもうれしいのです。

数字の話でいうと、メールの登録者4800人中、1100人が高松市内からの登録です。どれだけの市民が、芸術祭に個人として参加したいかということがよくわかる数字だと思います。今年、終わって、また3年後、芸術祭は続いていくと思うのですが、息の長い活動をしようと思っています。

佐々木 非常に元気の出るお話をありがとうございました。後で、質問をしたいと思います。それでは今のお話にもありましたが、小豆島もこの芸術祭に取り組んでいます。柳生さんは小豆島で、オリーブを活かした地域再生という取り組みをされています。それでは柳生さん、お願いいたします。

柳生 アンダー40は21年前でございました。現在61歳ではありますが、島では若者の柳生でございませう。どうぞよろしくお願ひいたします。

オリーブとアートについてということでしたので、私どもがやっていることを中心にお話しさせていただきます。

小豆島ヘルシーランドは、心と体の健康を追求して小豆島の発展に寄与することを目指してできた会社です。昭和60年10月に、小豆島のご出身で松下電器の松下幸之助さんの大番頭さんと言われた、高橋荒太郎さんと青年会議所活動を通じて出会いまして、高橋さんから小豆島に根を起こしたい、根とは事業だ、君やれ、君に任すと言われ、会社の資本金の半分を持っていただいて、一緒に会社をつくりました。

私どもの商品は、オリーブオイルを中心にした化粧品、サプリメント、そしてお酒です。「THE



OLIVE OIL」は私どもの戦略商品で、30 ミリリットル 8000 円という日本一高いオリーブオイルなのですが、これが売れています。これが私どもの活動の基礎になっています。3 カ月ほど持ちますから、うら若き女性の人たちには、3 カ月で 8000 円ならたぶん安いとっていただいているのではないかと思います。これは絞る前にオリーブを発酵させているので、香りがよく、浸透性が高くてべとつかないのが売りで、私どものHPからご購入いただけます。

私どものオリーブの森は、東南に向いていて、プライベートビーチがあり、今、約 7 万坪あります。最終計画では 10 万坪になります。この中に、それぞれの国にそれぞれのオリーブのミュージアムがありますが、世界のオリーブの国々からさまざまな資料、映像を集めてオリーブワールドミュージアムをつくろうと考えております。

また、小豆島には農村歌舞伎の舞台が、最盛期には 33 ございました。300 年前につくられた舞台が、今も使われているという小豆島の歴史を考えて、この中に平成の舞台、300 年後にも使われる舞台をつくりたいと考えています。

平成 23 年 3 月 12 日に、スペインのアンダルシアから樹齢が 1000 年を超える大樹を持ってまいりました。最初来たときは丸坊主で葉っぱも何もなかったのですが、今は繁って、2 年目からはオリーブの実がついております。東北の大震災の次の日に、この小豆島の地に到着してくれたということで、しめ縄を張って、3 月 15 日がオリーブの日なので、神道式でお迎えをしました。今は見学に来られる方も多く、小豆島のシンボルの一つになりつつあります。



チュニジアから、樹齢が 4、500 年の木を 40 本、小豆島に持ってまいりました。これは材木としてで、このオリーブの木の表皮と根からエキスを抽出しようということと、もう一つはオリーブの木を使った家具などにチャレンジしていこうという試みです。今朝、初荷が届いたのを確認しましたがけれども、とても大きくてびっくりしております。チュニジアは北アフリカにありまして、人口 1000 万人の国ですが、ここに 7000 万本のオリーブの木があります。後進国ではありますが、オリーブでは先進国なのですね。今は、世界第 7 位くらいですが、4、5 年前までは世界第 4 位のオリーブオイルの産油国で、農業生産の 4 割がオリーブオイルということです。この国に去年の 3 月に行って、オリーブの木を探してきました。一番びっくりしたのは、オリーブの木の貯木場があって野焼きでオリーブの炭をつくっていました。この木の炭も 3 t ほど輸入しております。

私どもの工場にはオリーブを絞る機械と、お酒をつくる機械があります。オリーブ薬膳酒製造機は、たぶん世界初だと思えるのですが、焼酎に十月十日オリーブの搾りかすや葉っぱ、枝、冬虫夏草を代表とする漢方やハーブを 13 種類漬け込んでつくります。十月十日というのは、女性の方はおわかりになると思うのですが、女性の方のための健康酒でございます。

先ほど、甘利さんのお話にもあった「目」というチームが土庄の迷路のまちに入ってくれて、タバコ屋さんを、目の錯覚を利用した素敵なアートの変えました。1日多い時は300人くらい入館されると聞いておりますけれども、これ一つのおかげで、迷路のまちに活気が出てきました。

北川フラムさんによると、10年間、毎年1つつアートを増やしていくと、恐らく年間10万人くらいの方が、この迷路のまちを訪れていただけるようになるのではないかと

ということです。そのために、地元行政と実行委員会とが協力し合っていくことになると思います。

私どもがやっている「MeiPAM01」は、約2年半前に、元呉服屋さんだった建物を、明治に建てられた3階建の蔵はそのまま残して、壁や瓦を1度降ろし、修正補強してつくった展示施設です。改装にはとんでもなくお金がかかりました。福武さんほどお金持ちではないので、大変でしたが、これが一つの起点になって「MeiPAM」を、今では4つ展開しております。「MeiPAM」とは、迷路の「Mei」と明治の「Mei」ですね、それにPAMは、「Performance & Art & marché」の頭文字からとった造語です。

「MeiPAM01」が起点になりまして、私どもがコーディネートして、先ほどの「目」とコラボレーションをしました。また、「MeiPAM04」は、地元の使われなくなったギフトショップ、元々は印刷工場だった建物を使っています。フィギュアの海洋堂の宮脇修一社長と去年出会いまして、そのバックアップを得て、ここに妖怪の造形を集めようということになり、今年の2月から6月20日まで、妖怪の造形を全国から募集しました。最初は問合せがなく、本当に集まるのだろうかと心配しておりましたが、締切の1週間前ぐらいからたくさんの作品が集まり出して、最終的には、3歳から82歳までの方の作品239点が集まりました。

審査委員長には、なんでも鑑定団の北原照久さんが交通費だけで来てくれて、『ガラスの仮面』の美内すずえ先生やアニメーターの須田正巳先生、宮脇社長はもちろん、宮脇さんに御紹介いただいた造形師の米田武志さんにも審査をお願いし、最優秀賞が決まりました。また7月28日から幕張メッセで行われた「ワンダーフェスティバル」で、第二次募集を開始しております。今度は恐らく4、500体集まるのではないかと考えています。

運がよかったのは日本テレビの「スッキリ」が、7月29日の朝、この作品たちを取り上げてくれまして、テレビを観たという来館者も多かったのです。

ここは、高松でスタートした夢屋さんとい



う駄菓子屋さんのショップも1階に併設しております。

私は直島の威力はすごいなとずっと思っております。そこで、直島の友達と一緒に直島オリーブという会社をつくりまして、「NaoPAM」というギャラリーを、今年の7月15日にグランドオープンしました。福武さんも来てくれて、これはいいとおほめいただいたのですが、入館料300円は高いと、100円にしろというアドバイスを現地の社長は受けたようです。

古民家の躯体をそのまま残して、家の中に、昔、瀬戸内海にいたナウマンゾウを藁で復元しました。カメノテの味噌汁が好評で、1日何十食も出ていると聞いております。

こういった活動を私どもはやっております、ぜひ勝又副市長にも行政の枠を超えて、小豆島や豊島、直島をもっと活用していただければ、お互いさらにメリットが出てくるのではないかと思います。先ほど近藤前長官が、異なる人々や文化が交わることがとてもいいことだとおっしゃっておられました。それは大賛成で、それこそが“発酵”だと思います。発酵して新しい価値や何かが生まれてくるということに取り組んでいきたいと思っています。

それからオリーブには非常に免疫力があります。オリーブの葉っぱには、オレウロペインがあって、人間の免疫力を高めるという働きがありますので、我々はオリーブを丸ごと活用してこうと、「オリーブスカイウェイ」という言葉で物事を進めております。これが私どもの活動でございます。ありがとうございました。

佐々木 「MeiPAM」で終わったと思ったら、「NaoPAM」まで来ましたね。まだまだこれは続くなど、楽しいですね。

今度は一転しまして、新潟です。先ほども申し上げましたように、越後妻有の「大地の芸術祭」があり、新潟市では「水と土の芸術祭」を開催するなど、新潟市も創造都市を進めておりますので、高橋さんにお話をお願いいたします。

高橋 今日は、高松市さんがこれからビジョンを発表するというタイミングでお話されましたが、新潟がこの10年間にやってきたことをお話したいと思っています。その際に先ほど近藤前長官がおっしゃられた、リーダーの先進性、市民の理解協力、才能ある推進者、地域の特性を見つける、寛容性、この5つの観点で果たしてきちんとやってこれたかどうかを、皆さんからぜひ採点していただきたいと思っています。

新潟市は、日本一長い信濃川の河口にあるまちで、田園地帯も広がっています。2005（平成17）年の近隣13市町村との合併により、本州の日本海側最大の都市となりました。創造都市政策の歩みですが、私は、実は15年ほど、地方分権推進の仕事をやってまいりました。また、ここ7～8年ほどは創造都市の仕事とダブって同時にやっておりました。そのときにずっと感じていたのは、地方分権の推進という行政ネタと創造都市づくりは一緒だなということです。そんな話をさせて



いただきます。そして冒頭申し上げたように、新潟市の歩みをお話することで、価値を共有していきたいと考えています。

近藤前長官と打合せたわけではないのですが、かぶるところがありまして、地方から見ても、前長官にお話いただいた社会的な背景から自治体の変化への対応を求められていると認識しています。経済のキャッチアップ、社会経済構造の変化、主には少子高齢化が一つの例でございますが、それに併せて情報化・国際化の進展があります。



例えば経済のキャッチアップは、先ほどのお話と完全にダブルなのですが、GDP（パーキャピタ）で1988年ごろから日本は3位～5位の間をうろうろしていました。1位のルクセンブルグは都市国家ですので、大きな面積を持つ国家としては、日本が実質1位になったのがこの時代です。社会経済構造の変化は、89年、90年ぐらいからの変化ですけれども、これは完全に構造が変わっていますよということが1点と、先ほどの経済の成長にも係るのですが、右肩上がりはないという時代に入っているのだということです。これは2、30年前からわかっていたことですが、そんな時代だったということでもあります。そしてもう一つ、情報化国際化に関していうと、15年ほど前のインターネットの利用者数は10%でしたが、最近では80%を超えているという状況になっています。情報やお金、人が、国境を越えて縦横無尽に行き来する時代になっているということです。

当然ですけれども、地方自治体としてはそれに対応していく必要があって、国家の話だけではなく、都市の個性を活かすまちづくりをやっていかなければ、国家も逆になかなか苦しいのではないかということが、先ほどの近藤前長官の話ともダブります。

では、都市の個性とは何かということですが、その前に前長官も触れられましたが、戦後の復興というときに、省庁が主導して一律に行うという効率的効果的なやり方をとったのは、大變的を射ていて、それが先ほどの経済のキャッチアップに辿りついたということがあります。

一方、都市の個性を活かすためには、例えば歴史的な特性を活かして、身近なガバナンス、つまり身近な市民の皆さんと一緒に、都市間はばらばらでも構わないということによっていく必要がありまして、従って地方政治のメニューがそれぞれに必要なようになってくるということです。そうすると、当然なのですが、地方分権というのは必然であります。そこで、権限と財源を地方に、それから都市内にも個性がありますので、都市内分権も同時にやっていこうではないかということに、新潟はずっと取り組んできました。

都市の個性には、さまざまな側面があります。自然物、インフラなどの社会共通資本、それから社会関係資本、文化資産などがベースになってさまざまな営みが行われています。

例えば社会共通資本である、萬代橋は日本一の信濃川に架かる重要文化財です。一級国道に架かる重文の橋は、日本に二つしかありません。それが、この萬代橋と東京の日本橋です。

それから社会関係資本、これは今、大變注目されていますけれども、地域の関係性、住民の関係性は、大變重要な資本であります。さらに文化資産、有形無形のさまざまな文化が、ここに関

わってきます。祭礼・神事、伝統芸能、習俗だけではなく、衣食住、特に食べ物も重要になってきます。

それでは、今、新潟市は創造的なまちづくりとして、どんなことを中心にやっているのかについて、さまざまあるのは高松市さんと同じですが、中心となっているコンテンツのお話をさせていただきます。

それは、「音楽と踊り」「食文化」「アニメ・マンガ」の3つです。音楽と踊り、食文化に関しては、新潟が湊町であったことに関わります。幕末に横浜や神戸などと一緒に開港する約束をしたのですが、新潟の開港は1869年と遅れ、2019年1月1日に開港150周年を迎えます。もちろん新潟は、その前にも信濃川や阿賀野川という大きな川を使った内港の舟運が盛んで、それに加えて、江戸や大坂と北前船が行き来する交易の中心にありました。湊を利用する方々をもてなす文化も同時に発達しまして、芸妓などによる花街文化が発達したのです。その意味で、音楽と踊り、食文化が一つのコンテンツになります。

そして80年代、90年代からアニメ・マンガについて、市民の方々の活動が活発になりました。これについては、最近、注目しながら文化創造都市のコンテンツとして取り組んでいます。

振り返りますと、1968（昭和43）年に既に音楽都市宣言を行っています。日本では大変珍しいのですが、1977年に練習室が主体の施設をつくっています。80年代になりますと、東京に若干遅れましたけれども、マンガの同人誌のコミック・マーケットである「第1回ガタケット」が華やかに開催されています。いわゆるオタク文化ですね。90年代になりますと、冬の「食の陣」や「マンガ大賞」などが実施され、ここから行政もマンガに関わっていきます。そしてフランスのナント市との市民交流が90年代前半からありまして、近藤前長官のお話にもありましたけれども、ヨーロッパにおける創造都市の先進都市と90年代ごろからずっと交流があったということになります。

2000年代になりますと、日本アニメ・マンガ専門学校が新潟に開校いたしました。そして地方分権では大きな転換点の一つありました。先ほど5つの要件の中のリーダーの部分で言いますと、2002年に今の市長であります篠田が当選いたしまして、さまざまな取り組みを具体的に進めてまいります。さらにこの年「新潟酒の陣」が初開催されました。新潟は酒どころで県内に当時は約100の蔵があり、その酒蔵が全部集まって、500円で2日間試飲し放題というイベントを開催したのです。期間中に救急車が7台？出動しました。翌年からはペットボトルの水をつけて、若干値上して開催されています

2005年に広域合併がございまして、13市町村、直前にもう一つ合併がありましたので、全部で15の市町村が合併しました。これで新潟市は面積3倍、人口が1.5倍になります。都市の特性という点では一つの新潟というより、中にたくさんの特性を持つ新潟が生まれたということになります。



2006年になりますと、食に関係してのさまざまな取り組みが行われ、さらにナントの音楽祭を仕掛けたルネ・マルタン氏に新潟にお越しただいて、いくつかのインフラ、音楽施設を観ていただき、「ここでこそ『ラ・フォル・ジュルネ』をやりたいね」とおっしゃっていただきました。

2008年に北海道でサミットがありましたが、労働大臣会合は新潟で開催されました。ここで「おもてなし」をし、新潟の食文化を中心にした、芸妓さんたちを含めたさまざまなおもてなしが、大変高い評価を受けました。我々が考えていた以上に、世界的に評価されるということがわかったので、ようやく遅ればせながらユネスコの創造都市ネットワークについて研究を開始しました。

翌年、ナント市との姉妹都市提携が締結され、さらに絆が強まったということで、横浜市さんなども交えて「日仏都市文化対話」が新潟で開かれました。そして先ほど合併の話を見せていただきましたが、都市内のさまざまな文化、伝統文化や生活文化をお互いに知るために、「水と土の芸術祭 2009」が初めて開催されます。これは中越地震、中越沖地震の風評被害も払拭しようではないかということも併せて考えられたものです。この辺りから政策に創造的なまちづくりが位置付けられてまいります。この間、ずっと佐々木先生にはお世話になっているわけですが、2010年以降になりますと、ラ・フォル・ジュルネが新潟で開催されるようになりました。また、新潟は交易のまちでしたので、かつて証券取引所やたくさんの金融機関があったのですが、そのことをだんだんみんなが忘れていきました。今も残っている金融機関のショーウィンドーをアートで飾って、新潟のまちの歴史をもう1度再発見しようではないかという活動「オフィス・アート・ストリート」が初めて行われ、これは今も実施されています。

「食の新潟国際賞」は、食を通じて世界の方々のために貢献していこうではないかというものです。2011年には、日本ファッション協会さんからご支援をいただき、本日と同様の創造都市のシンポジウムを開催することができました。

2012年に、ようやく文化創造都市ビジョンが策定されました。そして今年になって、いよいよ次の節目になります開港150周年の新潟を考える『志民委員会』が発足しました。これは市民の方々いわゆるアンダー40的な、若手が一生懸命考える委員会で、具体的な取り組みを進めています。マンガの関係なども、いよいよ具体的な形でオープンしてまいりました。

新潟市芸術文化会館「りゅーとびあ」には、2000席のコンサートホール、900席の劇場、380席の能楽堂があります。マンガ・アニメは、水島新司さん、赤塚不二夫さん、高橋留美子さんと新潟にご縁のある作家が多く、「ドカベン号」「犬夜叉号」というラッピングバスも走っています。そしてお祭りなども毎年のように開かれていますし、街中を歩きますと、マンガの家やドカベンの銅像がど〜んとあつたりします。

食文化都市としては、他のまちにも食文化はたくさんあるのですが、新潟はフルセット型、つまり土地改良から素材づくり、最後の「ちんとんしゃん♪」で楽しむところまである、フルセット型の食文化都市だという点が、ほかの都市と違うところと考えています。そんなことを今、まとめてユネスコの創造都市ネットワークに申請しています。

これらを市民と価値を共有していかなければ



ればいけないということから、「水と土の芸術祭」などさまざまなイベントを先行させてきました。もちろん市民との共有だけではなく、さまざまな都市との共有も大切だと思っています。日仏都市文化対話や自治体交流会議、そして CCNJ、それからユネスコの創造都市ネットワーク、こういうところといろいろな情報を交換することによって、市民の皆さんや行政マンも新しく考えていくことができるのだと考えています。本日もそういう思いでやってまいりました。

最後ですが、先日新聞に、「国境を知らぬ草の実こぼれ合ひ」という川柳が掲載されていました。まさに創造都市が国境を超えて、さまざまな種をまき、花を咲かせ、実を結ぶというようなことでご紹介させていただきまして、私のプレゼンを終わらせていただきます。

佐々木 どうもありがとうございました。アートとオリーブの後は、草の実で締められましたね。この後、今日のお話に対する補足をしていただいて、それからフロアから一般参加の方にご質問いただき、最後に近藤前長官のコメントで締めていただこうと思っています。

冒頭に勝又副市長がお話になった中で、高松市の創造都市推進ビジョンの目玉であり、一番特徴的なのが「こども」というところに焦点を当てて、保育園などに芸術士を派遣する事業だということがありました。今日、会場に、この事業を立ち上げました三井さんがいらしていますので、少し補足させていただきます。

三井 甘利さんも、私たち NPO が芸術士派遣事業を高松市に提案するときに手伝ってくれたメンバーの一人でした。芸術祭が始まって、若い芸術家の方々、特に高松市出身の方々が増えてくれるような仕事をつくれないうことで、イタリアのボローニャの近くにレッジョ・エミリアという市があるのですが、人口は 15 万人くらいでそれほど大きなまちではありません。そのまちが、第二次大戦後ドイツ軍が残していった戦車を売って、そのお金で芸術家の方をこどもたちの教育現場に派遣するという事業を始めました。それが 2000 年頃、とても有名になって世界中の教育者が研究をしました。そのまねを高松市でもやりませんかという企画書を書いたところ、当時の副市長さんに気に入っていただいて、2009 年に国の補助金をいただき事業がスタートしました。

芸術士という、先ほどの佐々木先生のお話にもあったように、何の資格もなく、アーティストとして生きているという証だけのコミットをして募集したところ、8 人ほど集まりました。一方、2009 年当時、市内にあった 27 園の保育園の園長さんから芸術士を受け入れたいと手を挙げていただきました。園長さんたちがすごいなと思ったのは、海のものとも山のものともわからないこの事業に手を挙げていただいたことです。そこでお見合い会をして、甘利さんにコーディネートしていただきました。具体的には、こども達の遊ぶ現場にアーティストが入ることによって、保育士さんとは違う目で、こども達の情操教育を手助けするという活動をしています。こどもたちはとても素直で、若くておもしろいおねえちゃん、おにいちゃんが来て、おもしろい遊びをいっぱい教えてくれるので、いきいきとしています。

一番変わったのは大人で、保育園の先生方が、きらきらと変わり始めてきました。これは狙ったとおりで、こどもというキーワードは実は大人を変えていきます。アートとこどもの掛け算で大人が変わっていくというのが、この 4 年間の私たちの成果だと思っています。

佐々木 私は、レッジョ・エミリアというまちには行ったことがないのですが、その保育園が素晴らしいのはよく聞いていました。まさか高松市で、そのアイデアを実施しているとは思わなかったもので、このお話を聞いたときはとても感動しました。

甘利さん、先ほど伺ったところ長野で生まれて、あちこち渡り歩いて高松に来られて、アート活動やこえび隊をやっておられるそうですね。率直にお答えいただきたいのですが、高松には寛容性がありますか？高松というまちは、寛容性があるので創造都市になれると思いますか？

甘利 私が最初にこちらに来たのは、仕事の面接でした。2回目が引っ越しだったのですね。本当に友達もいない中、職場と家との往復でした。でも当時から、人に対してこわいなと思ったことは全くなかったですね。土地柄というよりは、気候の関係があると思うのですが、すごく大らかな感じで、信号待ちをしているとおばちゃんが話かけてきたり、隣のおにいさんが何か持ってきてくれたり、そういうことがまだ残っているところなのです。

それで、高松がすごく好きになりまして、プラス芸術祭やこえび隊で島に行くようになって、島の方の温かさというのは、本当に計り知れなくて、それがファンになってしまった原因ですが、そういう土地というか、地域なのだろうという気がします。だから今、芸術祭で島に来る人たちが多くなっているのだと思います。

佐々木 つまり海園、田園、人間都市という点で言うと、日本で最も創造都市としての条件が揃っているということですね。だから、私もここでがんばっているのよということですね。ありがとうございます。

柳生さんにはオリーブとアートの話をしていただきましたが、その師匠である望月照彦先生が会場に来ておられます。望月さん、柳生さんの人となりで、なぜ彼はここまで頑張ったのか、コメントをいただけませんか？

望月 柳生さんは人柄が本当にすごくいいですよ。そして多摩大学という東京にある大学の社会人大学院に金土日と毎週、小豆島から通っていましたが、必ず東京に来ると、一人二人とネットワークを広げていくのです。彼の行動エネルギーは人的ストックでしょう。

今日の皆さんのお話を聞いて、思ったことが三点あります。まず、一点は創造の持続可能性を考えなければいけないということです。いつまでも福武財団や、行政に頼るわけには

いきません。そこには、甘利さんや柳生さんのようなビジネスモデルを持っている人が、創造的な活動をしていくことがとても大事だということがあります。この議論をしていただきたい。

二つ目は都市の個性を大事にして、高松なら高松が創造都市になることが大事だけれど、例えば世界では、アドリア海、エーゲ海で勝負をしているのです。だとしたら、瀬戸内創造圏というものをつくっていく必要があると思います。世界に認められるためには、一つの都市だけでは



なく、佐々木先生もおっしゃられましたが、ネットワークしていく必要がある。この議論を次にしなければならないというのが二点目です。

最後ですが、実は昨日、豊島に行きました。甘利さんがおっしゃったような作品を観て感動しましたが、一番感動したのは地元の小さな食堂です。「うらら」という食堂でしたが、そこには机が2つしかないのです。隣に座った人が東京から来た、30代後半のご夫妻でした。どうやってここに来たのですか。何泊なさるのですかと聞いたら、その若い二人がこのエリアで8泊するのだというのです。驚きましたね。皆さんは8泊も旅行できますか？せいぜい1泊でしょう？がんばっても2泊ですよ。ところが、この芸術祭や創造的な運動が、こういう新しいお客さんを増やしているのです。我々が考えなければいけないのは、ものを提供するサプライサイドの話だけではだめだということです。いかに創造都市をつくるかだけではだめなのです。

お客さん達が、どう創造都市にコミットしていくのか、近藤前長官にもぜひ研究し、アドバイスしていただきたいのですが、旅する“フラヌール”たち、すなわち“旅の知的遊歩者”をどのくらい増やしていけるかが、創造都市をつくる大きなヒントだと思います。要するに、物を提供するサイドではなく、それを需要するデマンドサイドをどうやって大きくしていくかが、創造都市の次の大きな課題ではないかと思っています。議論の中に、そんな視点がほしいように思います。柳生さんの話も含めて三点感じたことを挙げさせていただきました。

佐々木 三番目の点について、私は実はクリエイティブ・ツーリズムという新しいツーリズムを考えています。完全にマス・ツーリズムは終わっていますよね。近藤前長官を前にしてなんですが、富士山の世界文化遺産登録は素晴らしいことなのだけれど、観光公害が一番心配されます。だから、マス・ツーリズムではいけないのです。大事なものは、ビジターと地元の方が交流して、そこで新しい感動価値が生まれるということです。これは経験経済なのですが、それをクリエイティブ・ツーリズムと呼びたいのです。ユネスコのネットワーク都市の中で、サンタフェがそれを提唱していきまして、私も、クリエイティブ・ツーリズムを応援する世界のメンバーの一人です。日本では、やはり瀬戸内国際芸術祭で、島々を巡っていくツーリズム、これから新しいものが生まれてくる。だから8泊では足りないのかもしれないわけですね。そういった意味では、新しい研究課題が生まれてきているような気がします。

さて、高橋さん、新潟の経験を踏まえて、「高松はいけているか」一言で言ってください。

高橋 一言ですね。「いけてる」と思います。実は、私、大西市長さんと昨年フランスで初めてお会いしまして、そのときにさまざまな話をお聞きしました。先ほどの5つの要素の中で、先進的なリーダーというところをどうするのか、選挙がありますし、そういうリーダーに巡り合うのは、すごく難しいのだと思います。その他の要素は、みんなが一生懸命やっていけばできあがっていくのではないかと思っているので、その点では高松市はすごいまちだと思います。補足いたしますと、先ほど組織の話を副市長さんがなさいました。ああいう形で、行政の仕組みもよくご存知で、王道で仕掛けていく、夢も描きながら、王道で仕掛けられる首長さんは、なかなか稀で素晴らしいなと思いました。

佐々木 まさに創造都市の王道に行く高松市なのですが、さて、ここでフロアからも質問を受け

たいと思います。いかがでしょうか。

フロア 高松市民として一言いわせてもらいます。いろいろな意見があると思うのですが、先ほど近藤前長官がおっしゃった市民の理解と協力について、私は市民がありのままの生活を行っていけば、創造都市になっていくのではないかと思います。俗に言うおばあちゃんの知恵というか、だから先ほど言われたリーダーというのは必要ないのではないかと思います。これからの時代は、老若男女、特に年寄りがもう少し自信をもって、若い子を育てていくべきなのではないかと思っています。

佐々木 ありがとうございます。それではこの辺りで、近藤前長官に総括コメントをいただきたいと思います。

近藤 大変おもしろい議論をいただき、それぞれの事例紹介やいろいろなご意見を伺って大変勇気づけられました。先ほど申し上げたように、都市がその独自の文化の力を使って活性化していき、それが日本全体を元気にしていくということで、いろいろな動きが始まって、それがここまできたのだなと思います。



高松市も本当によいスタートを切っていると思います。瀬戸内国際芸術祭という大きな仕掛けがうまくいっているということもありますが、やはり問題は、先ほどから言われているように、これをどう持続させるかですね。いいスタートを切ったからといって、何もしないと何となく失速することもあり得ますし、ライバルが先にやってしまうかもしれません。どうやって持続させていくかが、一つのポイントになると思います。

そのためには、先ほど5つの条件ということを申し上げましたが、最終的には市民の方々一人ひとりが、本当に納得をして、文化芸術の力を信じ、常に新しい発見を地元の魅力としていく、あるいはつくっていく、そういう積極的な関与が一番大事なのだらうと思います。そうしていけば、常に新しい価値が見出される。文化芸術による付加価値として、どんどん新しいものがつくられていく、それによって持続ができるのだらうと思います。

それから、先ほど、需要サイドという話もありました。クリエイティブ・ツーリズムという言葉も挙がりましたが、スイスは観光立国ですね。私もユネスコでスイスの大使とは仲がよく、スイスは「サステイナブル・ツーリズム」ということをずっと叫んでいます。この「サステイナブル」には二つの意味があって、一つは環境に優しいということ、サステイナビリティという言葉は環境持続ということですね。ツーリズムを進める時にも、環境をしっかりと守っていく。同時に、観光客が訪れる文化創造都市、あるいは地域といったものにおいて、付加価値を生み出す力が続いていくという両方の意味かと思っていますが、そこをこれからは目指していくべきだらうと思います。

それを行っていく上での、障がい、バリアとなるのは、市町村では、目に見える経済的な効果がすぐ出てこない、これは無駄遣いではないか、市長の趣味ではないかという方々が、特に議会から出てくることです。そうすると、予算も取りにくくなりますね。本当にあちこちでそういう話を聞きますので、一番財布の大元締めとも言える議会にも理解し、コミットしていただくことが大事だし、結局それが市民に還っていくのだと思いますね。市民が選んだ議員さんですから。市民の方々が応援していれば、議会も賛成するというので、また市民に戻っていくのだと思います。

長期的に続けていく上で、すぐに効果が出ないのではないかという議論がどうしても出がちです。最近の日本は短期成果主義で、業務仕分の方々が、今年これだけ予算を使って、では来年どれだけ成果があるのかと、それが目に見えないと、それは無駄遣いというふうに切って捨てる傾向が、日本では強すぎるような気がします。長期的な視野でものを見るということ、これは戦後の日本が文化芸術に対して、十分な投資ができなかった大きな要因だと思っていますが、目先の利益、成果しか考えないということです。

その関連で私が好きな話が、フランスのリョテという将軍の話です。彼は檜の木が好きで、庭に大きな檜の木がほしいと思って、ある日庭師を呼んで、檜の木の苗を植えてくれと言ったところ、庭師は、今、檜の木の苗を植えても、大木になるまでに 100 年かかりますと答えたそうです。将軍はそうか、ではすぐやれと言ったのです。そういうことなら明日でもいいからとなりがちですが、長期的に時間がかかるからこそ、先延ばしにしないで、今すぐやらなければいけないのだということです。

多分、戦後の日本は、文化は大事、伝統文化が大事でも、文化に投資して成果を得るまでに 10 年、20 年かかるかもしれない、それよりもまず橋をつくりたい、空港が大事だということで、どんどん後回しにされ、いつの間にか忘れ去られて、70 年間十分に文化芸術に投資をしてこなかった、文化の需要と供給をつなぐマネジメントができてこなかったのではないかと思います。そういう意味で長期的な視野を常に持つ、効果が出るまでに長い時間がかかるからこそ、「今でしょ」ということになるのだと思います。その辺の視点を市民の方が持つことが、議会にも長期的な視野を持っていただくことにもつながるし、また、それにあった先進性のあるリーダーが選ばれるという土壌にもなるのだと思います。

本当にいろいろなご意見があり、熱心な試みがなされていることにうれしくなりました。ありがとうございます。

佐々木 いよいよ議論が盛り上がってきましたが、盛り上がりの中で終わるというのも、なかなかよいものでございまして、最後に私から一言だけ、お願いをさせていただきます。

私の友人でチャールズ・ランドリーという創造都市のリーダーの一人がおります。イギリス人なのですが、彼は創造都市をつくるためには、一人のリーダーでは足りない、都市の中に 100 人、200 人、1000 人のリーダーをつくらなければいけないとよく言っています。ぜひ皆様方一人ひとりが創造都市のリーダーになっていただきたい。よろしく願いいたします。

以上

【高松地域会議特別視察会開催概要】

開催日：平成25年9月26日（木）及び27日（金）

行程：

| 日時 | 視察先 | 概要 |
|-------------------------|-------------------|---|
| 9月26日（木） 3：00～14：20 | 高松丸亀町商店街 | 高松丸亀町商店街振興組合訪問 |
| 15：00～16：00 | イサム・ノグチ 庭園美術館 | 20世紀を代表する彫刻家イサム・ノグチは、1956年、初めて庵治石（あじいし）の産地である牟礼町を訪れ、1969年からこの地にアトリエと住居を構え、以降20年余りの間、NYと行き来しながら石の作家である和泉正敏をパートナーに制作に励んだ。イサム・ノグチ庭園美術館は、150点余りの彫刻作品のほか、自ら選んで移築した展示蔵や住居イサム家、彫刻庭園などが配置され、全体が一つの環境彫刻となっている。 |
| 16：20～18：00 | 石の町・牟礼町 | ボランティアガイドの案内で源平屋島合戦の史跡見学後、讃岐石材加工協同組合訪問 |
| 9月27日（金） 10：00～11：30 | 地中美術館 | 「自然と人間を考える場所」として、2004年に設立。直島の南側に位置し、館内にはクロード・モネ、ジェームズ・タレル、ウォルター・デ・マリアの作品が安藤忠雄設計の建物に恒久設置されている。直島の美しい景観を損なわないよう建物の大半が地下に埋設されている。 |
| 12：30～13：30 | ベネッセハウス ミュージアム | 安藤忠雄設計のミュージアムとホテルが一体となった施設。美術館部分にあたる「ミュージアム」は外に向かって大きく開かれた構造をもち、室内にいても常に外部の自然を感じることができる。館内には収蔵作品に加え、アーティストたちがその場所のために制作したサイトスペシフィック・ワークが恒久設置され、施設をとりまく海岸線や林の中にも点在。 |
| 13：30～14：00 | 島内周遊 | 瀬戸内国際芸術祭の屋外展示作品「南瓜」、ANDO MUSEUM「家プロジェクト」（本村地区）、直島銭湯「I♡湯」（宮ノ浦エリア）などを見学 |

高松丸亀町商店街 訪問記録

日時：2013年9月26日（木） 13：00～14：00

場所：高松丸亀町商店街振興組合事務局

ヒアリング：古川康造氏 高松丸亀町商店街振興組合 理事長

「高松丸亀町商店街 再開発について」古川理事長の説明骨子

1. 再開発の社会的背景

- 全国の地方都市の中心市街地が壊滅的な状態にある。
 - ・ 市の中心部は既にインフラ整備が終わっている宝の山のはずだが、商店街が衰退、後継者も業種転換のパワーも失う。
 - ・ 土地は相続の度に細分化され、うなぎの寝床のような区画が並ぶ。
- 人口減、高齢化社会という有史以来、日本人の誰も経験したことのない、大地殻変動が起きつつあり、これにさまざまな制度、ビジネスモデルが合わなくなってきている。



2. 高松丸亀町商店街の地域特性

- 開町 1588 年、420 年の歴史を持つ非常に古い商店街。かつては商圈 400 万と豪語。8つの商店街がアーケードで連結され、総延長 2.7 キロの全国で最も大きな商店街エリアだった。
- この商店街がバブルによる地価の高騰で、一気に衰退を迎える。これが高松市の財政を直撃
 - ・ 高松中心部の面積比率は 5%だが、かつて全市の収入の 75%をこのエリアが挙げていた
 - ・ バブル崩壊後、わずか 10 年から 15 年で地価は 11 分の 1 まで下落し、高松市の固定資産税はピークの 7 割減となる
 - ・ 維持補修費の比較では、面積比率 5%の市の中心部で生活している人々の行政コストは、わずかに 875 円だが、郊外の 95%部分で生活すると 5127 円のコストがかかる。大きく広がってしまった街をいかに正しく縮めるかが、市の喫緊の課題。
- 衰退のもう一つの要因は、1988 年の瀬戸大橋の開通
 - ・ 物流が確立し、地方の大手資本が一気にこのまちに流れ込んできた。県外資本の大型郊外店の進出で、売り場面積は広がったが、県全体の売上、従業員数、事業所数が落ち込む。本社決算によって、地域の住民の金が県外に流出し、地域経済が極度に疲弊してしまった。

3. 再開発計画の概要

- 瀬戸大橋開通によるダメージを予想し、開通の 1988 年に再生計画づくりに着手
- A から G まで 7 つの街区に区切り、街区ごとにコンセプトとゾーニングを明確化
 - ・ A 街区は 2006（平成 18）年に竣工。セレクトショップゾーンで高級店を中心にゾーニン

- グ。上層階は 47 戸の借地権付きマンション。大きな広場を整備し、にぎわい創出に成功
- ・ B 街区は 2009（平成 21）年竣工。フードコートゾーンで、開発前 1 軒もなくなっていた飲食店が、現在は 36 店に。
- ・ C 街区も 2009（平成 21）年竣工。「美と健康」をコンセプトに、病院、ビューティークリニック、歯科、リハビリセンターなどを集中的に配置
- ・ G 街区は 2012（平成 24）年竣工。開発前はシャッター通りになりかけていたが、都心生活をコンセプトに、大型マンションと都市観光を切り口にホテルを誘致
- ・ DE 街区は 2015（平成 27）年着工を目指し検討中
- 再開発計画の根底にあるコンセプトは、いかに居住者を取り戻すか。ここに住んでみたいと思わせるパラダイスづくりにある。
 - ・ 開発ビルの上層階に高齢者向け住宅 400 戸を整備し、1500 人の居住を目指す
 - ・ 現在、400 戸のうち 200 戸完成し、完売。
 - ・ パラダイスの実現のためには、住宅整備に併せて、業種の再編成、テナントミックスが必要。

4. テナントミックスを実現するために——土地の所有権と利用権の分離を実施

- 細分化された土地に個人の利害のみで事業を行う地権者に対し、まちを一旦白紙にして無駄な利害調整をせず、まちに必要な業種、施設を整えるための解決策が「土地の所有権と利用権の分離」だった。
 - ・ 街区ごとに、地権者全員の同意を得て、共同出資会社と 60 年間の定期借地権の設定をすることによって、土地の所有権を手放さずに、利用権だけをまとめて一旦（60 年間）放棄する
 - ・ 再開発した共同ビルを、まちづくり会社というプロの集団が、正しいテナントミックスと運営を行うことによって、新たな商業集積による利益が 60 年間地権者に配分される
- テナントミックスの選定基準を、商業者の目線ではなく、生活者の目線に置く
 - ・ 特に高齢者にとってパラダイスとなる、快適に生活できるまちづくりを目指す
 - ・ 病院の開設、介護施設、生鮮 4 品の新しい流通の仕組みの市場、ひろばの整備、ホームセンターの誘致、温浴施設等々、ライフインフラの再整備が必要だった
- マンション購入の最大の理由は、価格の安さと歩ける範囲で必要な施設がすべてそろふこと
 - ・ 定期借地権を利用した再開発事業は全国初だが、一般の再開発事業の約三分の一程度の価格で分譲できた
 - ・ 医療が充実し、介護施設が用意され、市場も温浴施設もある、自分達が生活する上で必要なものがすべて歩ける範囲で揃い、以後一切車に依存しなくても生活できることが評価された

5. まちの魅力を高めた二つの事業

- 町医者 of 復活
 - ・ 再開発ビルの中層に展開し、検査機器は充実しているが、入院設備を持たない。ドクターは往診回診するため、上層部に整備した高齢者向けマンションが病室に当たる

- ・ 国立医学部付属病院と県立病院が後方支援病院となる。このまちの病院で重大な病気が発見されると、後方支援病院に送り込まれ、高度医療を受け、術後、I C Uを出れば、入院せずに自宅マンションに帰り、ここの病院のドクターがケアする。
- ・ マンションの居住者にとっても、自宅の階下に24時間対応してくれる病院があり、終末医療まで担保されている。後方支援の病院にとっても、入院患者を抱えなくて済む新しい町医者のお仕事として注目されている
- ・ ドクターはすべてこの商店街の出身者。東京に流出していた優秀な人材を地域に取り戻すことにも成功



- 市民が自由に使えるステージとしてのパブリックスペース「ひろば」
 - ・ かつての3つの商店街の結節点に、建物を大きくセットバックして、民間の土地を差し出し、開発前の約5倍のひろばを整備。かなりの部分に民間の土地がはいっているため、お役所も厳しい規制をかけられない、民間投資で自治権を確立。
 - ・ 商店街がイベントを企画し、集客しても売上には結びつかない。商店街が客寄せイベントを企画運営するのではなく、イベントをやりたい市民が自由に活躍できるステージをつくり、イベントを行う市民をサポートする組織をつくった。(まちづくり会社に、イラストレーター、イベントのプロ、音響装置のオペレーターなどをプロパーの社員として雇用)
 - ・ 昨年1年間で206本の持ち込みイベントが実施され、まちの賑わい装置として力を発揮

6. 計画推進の阻害要因

- 1990(平成2)年に事業着手したが、A街区竣工は2006(平成18)年。計画づくりに16年を費やす。その多くは、現行法との戦いであった
 - ・ 全員同意に費やしたのは4年。地権者は一刻も早く計画の実施を望む
 - ・ 都市計画法、再開発法、建築法、建築基準法、道路法、道路交通法、会社法、証券法、出資法、商店街振興組合法と、ありとあらゆる法律が新しいまちづくりを阻害する大きな要因となり、これとの調整にずいぶんと労力を費やした。

7. 丸亀町商店街再開発成功の要因

- 定期借地権を利用しての、土地の所有権と利用権の分離という土地の利用方法をコントロールできる仕組みをベースにつくった
 - ・ 国が取り組んできた中心市街地活性化が動かなかったのは、土地問題が解決できなかったから。地域の土地問題は地域で解決せざるを得ない
 - ・ 市の中心部で地権者全員の同意なんて絶対にあり得ないと言われていたが、いざというとき一致団結する地域のコミュニティが、420年間現存していたからこそ実現できた。

<質疑応答>

質問：開発の成功の要因が土地の所有権と利用権の分離にあるということだが、地権者の方々に60年後のことを心配される方はいなかったのか？

古川：60年後に本当にどうするのだという侃々諤々の議論があった。都市計画だけでなく都市経営、建築、商業、流通、金融、法務、ありとあらゆる分野のかなりスキルの高い専門家と地権者との合同の会議で、都市計画の権威の先生が、例えば20年後に、この商店街のこの土地がどんなふうになっているか正しく予想できる人はいるかと聞いたところ、誰も答えられなかった。つまり、60年後のことなんか知るかというのが最終合意。ただ、厳然たる事実は、この事業がうまくいこうがいくまいが、60年後にはその土地は更地になってその面積、その場所が孫たちの手元に還るということ。明日にも死にそうになっている商店街の地権者が、60年先の心配をして必死になって議論する、そんな不毛なことはやめましょうというのが、合意形成の基盤となった。

質問：60年ではなく、30年や40年という中間的な数値は出なかったのか？

古川：逆に、建築の専門家の統一見解では、鉄筋コンクリートのビルは正しく建てれば100年保つということだったので、本来は100年で定期借地権を設定しようと思っていた。ところがいざ契約となると、60年ぐらいで一旦ビルの様子を見ようということになり、そこでビルが保つようであれば、もう30年まで続けられるような特約条項を定期借地権の中に盛り込んだ。60年後の判断は我々ではなく、孫たちがすることになる。

質問：地権者が権利を放棄するときの保障は？

古川：現在、地権者の皆さんは年8%の配当を受けている。この8%の分母は、過去お持ちになっていた資産。土地と建物の評価に対して8%が地代として配当されているので、1億の資産をお持ちの方は年800万円ずつ受け取っている。つまり地権者はうなぎの寝床のような区画で、個人の権利を主張する方が得なのか、全体の利益をシェアさせた方が得なのかという損得勘定を行ったわけだ。

質問：商店街の長い歴史の中で、地権者の変動はどの程度あったのか？

古川：この商店街には420年の歴史があるが、420年続いていた店が1軒だけあった。その店は今回の開発で廃業した。他に約100名の地権者がいるが、100年を超えて商売を継続していた人が14、5人。残りは時代時代で入れ替わってきている。これが商店街が維持されてきた一つの大きな要因でもある。新陳代謝が過去からずっと行われてきたわけだが、戦後60年間、これが止まっていた。なぜかという、高度経済成長期で商品さえ並べていけば、いくらでもモノが売れる時代を過ごしてきたから。今回の計画はまさに強制的な入れ替え戦で、もう一度新陳代謝を行おう、そのために土地の所有権と利用権を分離しようというもの。

質問：地権者のうち、外部に土地を貸していた人はどのくらい居たのか？

古川：これがうちは居なかった。長い歴史の間には当然破産するところも出る。その土地は外部に流出してしまいがちだが、それを一切流出させずに、商店街振興組合が買い支えてきた。これがまちのルールだったので、外部の人たちは一切まちの中に入っていなかった。土地を外部に流出させるなというのが流儀。流出してしまうと、再開発などをやろうとする際、投機目的のファンドなどたちの悪い人たちが入ってきて、なかなか合意形成ができない。先人の知恵で、土地を一切外部に流出させなかったことも大きい。

質問：それはこの商店街だけなのか、高松市内など周囲にもそういうルールがあったのか？

古川：おそらくこの商店街だけだと思う。元々讃岐のお城は丸亀市にあったが 1588 年に高松に移ってきた。そのときに、初代のお殿様が、丸亀の城下の町人も一緒に引き連れて城下の一等地に配置したのが、この「丸亀町商店街」の名前の由来。よく丸亀市と勘違いされるが、高松市丸亀町。初代のお殿様が大変に優れた方で、絶対権限を持っているタウンマネージャーが、町割りを行い、正面玄関の一等地に町人を配置し、東西の道に大工町、紺屋町などの職人町を配置したあと、お殿様が「よきにはからえ」と全部町衆に任せた。そのため町人自治が非常に発達し、これがこの計画を成立させた一つの歴史的背景になる。その DNA がずっと残っていて、あまりお役所に関与されたくない、自分達のまちのルールを自分達で決めて、自分達でやっていこうという意識が強い。

質問：古川さんがいらっしゃらなかったら、この事業は進まなかったのでは？

古川：それは全くない。理事長のようなリーダーが必要ですねとよく言われてきたが、この計画が成立した一番大きな要因は、個人の権利を主張するより、全体の利益をシェアさせた方が得だという地権者の見識の高さ。この計画づくりを始めた 1988 年は、商店街のピークの頃。一番売上も通行量も多かった頃に、計画づくりがスタートしている。恐らく 10 年か 15 年で、この商店街は消滅するだろうということ、皆さんが予想していた。だからこそ、余力のあるうちに次の一手を打っておこうと、計画づくりが始まった。これはまさに地権者の見識の高さであり、優れた商売人の、時代の先を見る目が計画を進めさせた要因であると思っている。

質問：「廃業支援」も行ったということだが、廃業はお店のオーナーにとっては大変な決断では？

古川：大変な決断だった。特に 420 年続いたお店さんは、お前の代で絶やすのかと親戚一党からつるしあげをくらったようだ。ここは平成元年ごろまでは、なんの困ったこともない商店街だったが、バブルで地価が高騰した際、銀行団が押し寄せてきて、とにかく土地さえ担保に出せば、いくらでも資金をまわしてくれ、むしろ借りろと言ってきた。それに若い地権者はうっかり乗ってしまって、土地を担保に大きな借財をし、新たな土地購入やマンション建設に投資した。ところがバブルが弾けてわずか 10 年で、土地の値段が 11 分の 1 までどすんと下がり、全員が担保割

れを起し、債務超過に陥った。その時点から銀行は一切投資しなくなり、回収しか考えなくなった。時を同じくして瀬戸大橋の開通があり、大手資本が一気に流れ込んできて、商店街は売上を奪い去られた。つまり自分達は大きな借金を抱えて、その上、返済金をどんどん失っていった。大型店に対向するために業種転換や新たな商品開発をやろうとしたが、銀行が一切貸さなくなっていたため、それもできなかった。彼らが次に考えたのは、まさに廃業だったが、廃業すらできなかった。なぜかというと、廃業を宣言したとたん銀行がやってきて土地を競売にかける。それくらいドラスティックで、老舗の大店からバタバタと倒産が始まった。商品開発もできない、業種転換もできない、廃業すらできない、売上はどんどん失われていく、もう座して死を待つばかりという状態だった。

そこで、地権者さんを一旦正しく廃業させるために、従前債務の回収を行った。再開発事業によって、一切民間投資が起きなくなった商店街に、国に投資をさせて従前債務を回収し、一旦皆さんを無借金にしてあげ、その見返りに60年だけ土地の利用を放棄させた。その上、年8%の配分がもらえるとあって、地権者としては一刻も早く開発をスタートさせたがった。

公費前提の事業ではあるが、その背景に投資効果という予算があり、税金の話で言えば、建物の固定資産税だけでも従前費に比べて900%の税金を納めている。私どもの資産は、商店街7つの街区が全部できあがると、年間の合算で約10億になる。お役所に主張しているのは、補助金を投資として判断し、投資効果を評価いただきたいということで、これをずいぶん高く評価いただき、事業の資金を獲得することに成功した。現在投下された公金に対する利回りは6%程でまわっており、投資案件としてもおいしくなっている。郊外にいくら道路を広げたところで、税収は増えない。教育も医療も、福祉も農業もお金を使うばかりなので、これが中心市街地活性化の必要性の大きな要因であったと思う。

質問：生活者目線によるテナントミックスというお話だったが、テナントミックスの目指す形や姿をどのようにステークホルダー間でコンセンサスを形成されたのか、また、それを形作るために、外部からもテナントを集めたと思うが、そのあたりのポイントは？

古川：この計画のベースは、単純に言うと自分たちの老後の担保。自分自身が80歳になってこのまちで生活することをイメージすると、必要なものがわかる。まず医療は絶対に避けて通れないし、介護施設も必要。地域で採れた正しい野菜、正しい魚がきちんと流通するところで生活したい。高齢化が進むと、マンション生活になるが、大きいお風呂には入りたい、では温浴施設を整備しようというように、すべては自分達の老後の担保。自分達という主語はつくが、おそらく皆さん同じことを考えているはず。それがコンセンサスにつながった。

テナントリーシングする部隊は、まちづくり会社の中にある。運営の仕組みは各7つの街区にそれぞれ地権者の共同出資会社をつくり、この会社と60年の定期借地権の設定をして、この会社が事業主体者となって共同ビルを建てる。地権者にビルの運営能力はないので、新たにまちづくり会社を作った。社員は地権者ではなく、プロをプロパーの社員として雇用し、このまちづくり会社に自分達の共同ビルの運営を委託している。その上に商店街振興組合と高松市があって、この会社のサポーターとなっている。まちづくり会社の中にテナントリーシングする専門部隊があり、正しくテナントリーシングをしていく。つまり商業調整を行う。野放しにして飲食店ばかり

になって、過当競争で共倒れということがないように調整する。すべてコントロールされている郊外店の合理的な運営の仕組みを、まち中に取り込んだ。

丸亀町ファクトリー事業という構想もある。これからは、単にものを売るだけでなく、「ものづくりのできる人たちしか生き残れない」を前提にすると、いかにものづくりのできる若い人たちをこのまちに取り込んでいくかが求められる。地域にも、ものづくりに対して意欲も、アイデアも持ち、ガッツもある若い人たちがたくさんいるが、開業資金を持っていない。銀行は、一切開業資金の融資はしない。これから商売を始めたいと思っている、ものづくりのできる若い人たちを導入するために支援をする事業で、具体的には、出店の際の内装工事を受け持ち、安い家賃を設定しようというもので、今は、ワゴンをつくって1日1000円で貸し出している。生産者などが集まって、結構商売になっている。ここは、元々四国で一番地価が高い地区なので、ワゴン1台とはいえ、実際にお店を構えるにはかなりの資金が必要だが、リスクなく1日1000円の使用料で腕試しをして、ヒットするお店が出てきている。それをキャッチして開発ビルの中に入れていく。その時の開業資金はすべて支援するという仕組みだ。

質問：県や市など行政とは、友好的関係がとれていたのか？

古川：正直なところ、開発当初の最も大きな抵抗勢力は高松市役所だった。役所としては、そもそも前例がないし、どこかに集中投資することはできない。国は簡単に「選択と集中」と言うが、そんなことができるわけがなく、こういう計画に対しては、当然抵抗勢力になる。それを乗り越えてお役所にも協力していただきながら計画をつくり、現在は市役所ともがっぷり四つに組んだ官民連携が成立している。

やはりどこかに成功例を一つ作らないと、なかなかそういったことはできない。中心市街地活性化策と市長が言え言えほど、では郊外は切り捨てなのかという話にしかならず、どんどん票を失っていく。お役所主導ではなく、民がまずやって、それをお役所に支えてもらって、成功例をつくれればコンセンサスにつながっていくが私どもの戦略で、現在は大西市長とがっぷり四つに組んだ官民連携が成立している。

質問：お話を聞いていると、やはり歴史的にこの商店街が持っているコミュニティの姿があって、このモデルは簡単に他ではまねできないと感じる。多くの商店街が視察に来て勉強して帰っているだろうが、それでうまくいきそうなところの話を聞いたことがあるか？

古川：水平展開はまず無理だと思う。水平展開しない要因は二つ。一つはまだまだうちの計画が完成形ではないこと。7つの街区が全部整って、地権者配分が出るようになると、放っておいても水平展開していくが、まだまだ皆さんが懐疑的であるという感じがする。

もう一つは定期借地権による再開発事業というものの自体を、お役所がまだ認めていない。そんなものはあり得ないとか思っていない。国交省からもそう思われているので、なかなか民間がやろうとしても、お役所が抵抗勢力になって進んでいけないということもある。

以上

讃岐石材加工協同組合 訪問記録

日時：2013年9月26日（木） 17：00～18：00

場所：讃岐石材加工協同組合 事務局

ヒアリング：代表理事 漆原憲和氏 他

I. 「庵治石材加工産地の歴史と現状」について説明骨子

1. 庵治石の歴史

- 平安時代の古文書の中に「庵治石」と表記されている例はない
 - ・ 「讃岐ノ石」の表現はあり、都の要所で用いられていたことはわかっているが、「庵治石」という表記はない。
- 江戸時代にも「庵治石」という表記はないが、各地の普請に使用されていた
 - ・ 石材を加工する技術について遡ることができるのは江戸時代。各地のお城の修復に高松藩から普請に行っており、そこで石の技術が情報として蓄積されたと考えられる。
 - ・ 1642年に高松藩に転封された初代藩主松平頼重公は、さかんに源平の史跡を整備し、それ以降、庵治石が使われた。かつて御用石と呼ばれた丁場（採掘場）から、高松藩御用達の石が切り出され、この辺りを「大丁場」とも呼ぶ。
 - ・ 1815年、屋島の東照宮の造営に際し、御用丁場から切り出した庵治石が加工され使われた。当時、大阪和泉市付近から多くの石工が招聘されたという話も伝わっており、彼らがそのままこの地に住み着いて、石材業を始めた。
- 明治以降「庵治石」と表記されるようになる
 - ・ 男木島の灯台が、国内では庵治石を使っている唯一の灯台であり、今も現役で備讃瀬戸の安全を守り続けている。
 - ・ 「坊ちゃん湯」として有名な道後温泉本館の湯釜などに使われている。皇室専用の浴室の湯釜と湯槽が庵治石。
 - ・ 男木島灯台や坊ちゃん湯に庵治石が使われている頃、この産地も大きな変革のときを迎える。このころから火薬を使用するようになり、岩盤の石まで採石がスムーズにできるようになった。火薬が導入されて以降、石の産業は大きく成長していった。

2. 庵治石材加工産地の現状

- 庵治半島という非常に狭い範囲の中で、産地が形成され、車で15分ほどの範囲に採石場とすべての加工場がある。
 - ・ 石屋同士の絆も強く、グループでよい製品をつくる体制になっている。それを全国の石屋にまとめて運送することもできる。
 - ・ 茨城県の真壁地方、愛知県の岡崎地方と庵治が三大産地と言われているが、地元で加工できる場所は、この産地だけ。あとの二つの産地は製品を販売することに主軸を置いている。この産地だけが、墓石・庭園用石材・石彫品等の製造と全国の石材取扱店への卸売りを主力としている。

- 庵治石をコンスタントに産出
 - ・ 平成 24 年度の採石量は 65000 トン。これは非常に高額な墓石として出せる石からさまざまな用途に使う石まで含めた量。高額な「切石」については、平成 24 年度が 4413 トンと非常に少なく、割石や栗石、庭石と切石を併せて 24 年度は 65000 トンということになる。

- 国内石材輸出入の推移
 - ・ 1990 年の花崗岩の原石の輸入量は 115 万トン、約 50 カ国から花崗岩が輸入されて、ちょうどこのときが、日本国内の石材の加工産業の最盛期。これに向かって設備投資がどんどんなされ、なおかつ技術者が新しい分野として石材産業の中に入ってきた。このとき、庵治石および国内の他の産地の原石の採取もピークに達している。
 - ・ しかし、中国製品の輸入量も 1990 年から約 15 年間、2004 年までの間に 30 万トンから 115 万トンと増え、非常にたくさん日本国内の市場に入ってきた。これによって、日本国内の石材加工産業だけでなく、採石産業も疲弊する。1990 年をピークに、どんどん国内の石材産業が衰退していった。
 - ・ 一方、販売では、消費地の石屋さんが中国製品を扱って、安い価格のお墓がたくさん市場に出ていったため、消費者の側からみるとメリットもあった。
 - ・ 国内の加工産業は、工場がどんどん機械も従業員数も減らしていった。この産地は、今なお加工を盛んにやっているが、生産能力としては恐らくピーク時に比べると、半分くらいに落ち込んでいる。
 - ・ 庵治石の採石量における最高値は、平成 17 年の約 1 万トン弱。一番少ないのは平成 6 年の 4300 トンで、現在はほぼそれに匹敵する。それでもピーク時の半分の能力があるということであり、切石の加工はほぼコンスタントに対応できていると見ることができる。

- 庵治石の使用例
 - ・ イサム・ノグチが設計した札幌のモエレ沼公園の石積みに庵治石がたくさん使われている。値段的には墓石材に比べると安い石だが、施工すると非常にきれいで、未来永劫にわたってあの石積みはおそらく崩れない。
 - ・ 新しくできた首相官邸のシンボルは、『切り出したままの自然石、そして、強くしなやかにすくっと伸びた青い竹』。石については庵治石が使われている。この庵治石の素材は庭石で、値段は墓石材に比べると安いが非常にすばらしいもの。
 - ・ 前回の東京オリンピックの聖火台の下の石も庵治石だが、どこがつくったのか調べてもわからない。庵治石という記録は残っているのだが、どこが納めたのかわからず、記録も残っていない。

- 国の重要有形文化財 791 点を所蔵する「高松市石の民俗資料館」
 - ・ 庵治石はいろいろな方面に使われているが、残念ながらそのきちんとした記録が残されていない。これからは、記録を残していこうと思っている。その一つとして石の民俗資料館ができた。石の業界では唯一、石工用具の重要有形民俗文化財が 791 点所蔵される。

いろいろな庵治石に関する情報も持ち込んで、将来にわたって遺していきたいと考えている。

- ・ 地域団体商標が導入され、商標登録の制度が変わったので、「庵治石」を商標登録し、さらにこの産地で出荷する分については、産地でも記録を留めておくことを始めた。そういったことを中心に将来にわたって庵治石の商品をきちんと把握し、管理していこうと思っている。今は仮に3つの組合が管理しているが、いずれ石の資料館に引き継ぎたい。
- ・ この資料館は表に出ない資料として軟石の資料もたくさん持っている。資料館には 791 点の国の指定文化財があるが、所蔵されているのは約 6500 点。きちんとした資料でないものも併せると約 9000 点、1 万点近い資料がある。これらは石屋の若者たちが奔走して集めて整理した。今は若者たちが先頭に立って産地をひっぱっている。むれ源平石あかりロードについても若者たちが中心。
- ・ 先々、私どもが庵治石という素材を大切にしながら、そこに使われた技術を道具も踏まえて、今まで使われてきた技術を伝承し、なおかつさらに磨きをかけながら新たな技術を伝えられたらと思う。

<質疑応答>

質問：1990年に輸入がピークとなっているが、大半が中国からの輸入なのか？

答え：1990年代は原石の輸入なので、50カ国ぐらいから輸入していた。もちろん中国もあるが、アフリカ、オランダ、インドなど非常に広い範囲から輸入していた。

質問：製品になると中国になるということか？

答え：そうだ。製品になると99%中国のものになる。

質問：原石の輸入量が減っているのは需要が減ったということか？

答え：いや、製品に変わったということ。原石ではなく製品として輸入するようになった。



訪問団と漆原代表理事（右から2人め）

Ⅱ. 「むれ源平石あかりロードについて」説明骨子

1. むれ源平石あかりロードの概要

- 元気な産地づくりを目指して平成 15 年にスタート
 - ・ 2003（平成 15）年に有志が集まって元気な産地をもう一度実現していこうと、石材の産業文化と源平合戦の史跡をベースにした文化という二つの文化を融合させた事業が「むれ源平石あかりロード」。
 - ・ 今年で 9 回目を迎え、8 月 3 日から 9 月 16 日まで 45 日間開催した。
- きっかけは NHK の大河ドラマ「義経」
 - ・ 牟礼町は、源平の屋島合戦のあったところで、その史跡が点在している。2005 年の NHK の大河ドラマ「義経」で、源平合戦が脚光を浴びると、屋島の合戦の地である牟礼町も注目されるだろうと、当時の町長の声かけでむれ源平まちづくり協議会が発足し、そのなかで史跡を中心としたまちづくりを始めた。
 - ・ お盆の頃に屋島の合戦シーンが放映されるということで、それに合わせて約 1 キロの道沿いに点在している史跡、平家が牟礼にあったときの門の跡地「総門」、弓流しや洲崎寺、那須与一が扇的を射た時、馬をとめたという駒立岩などをライトアップしようという企画が生まれた。
 - ・ 個々の史跡をライトアップしても次の史跡がどこにあるかわからないので、その道しるべとして、地元の特産の石を使った灯りを置こうということになった。総門跡から、点と点を結んで駒立岩まで歩いてもらおうというのが最初のきっかけとなり、それをイベント化したのが「むれ源平石あかりロード」。
- 青年部等の協力を得て作品をつくり、道沿いの 80 世帯の負担で作品を点灯
 - ・ 9 年前は手探りの状態から始めたが、地元の石屋さんの青年部等に協力いただき、石と灯りをテーマとした作品づくりを進めた。当初はなかなか作品を集めるのが大変だったが、約 100 点の作品が集まった。
 - ・ 道沿いの 80 世帯は、昔ながらの地域の横のつながりや地縁が非常に濃く、80 軒すべてにこういうイベントをするのでと歩いてまわったところ、ほぼ全世帯からおもしろそうだからがんばってという感触を得て、家の軒先や玄関をお借りして作品を置かせてもらっている。今年は全部で 250 点ほどの作品を置いているが、1 世帯あたり 2 つ置くこともある。電気代はすべて設置した家の方にご負担をいただき、45 日間、毎晩点灯している。
 - ・ そのほか毎週土曜日に、お寺でライブや屋台といったイベントを開催。お寺では、フラメンコやロックのライブも行った。実行委員会のメンバーは 30 人ほど。地元の中学校のボランティアが 100 人、そのほか高校生や一般のボランティア、大学生等を入れるとおよそ 200 人規模のボランティアに 1 日 50 人前後、お手伝いいただいている。

2. むれ源平石あかりロードの目的と効果

● 地域産業の振興も目指す

- ・ 地域産業の振興もむれ源平石あかりロードの目標の一つ。出展した石あかりはすべて値段をつけて、販売している。
- ・ 石材業界は墓石がメインだが、お墓は大体寸法が決まっていてアレンジすることがない。石あかりはテーマが自由で、発想をふくらませながらいろいろな作品づくりがなされている。9回目ともなると、ほかの素材とのコンビネーションなど、1年目に比べ、かなりレベルの高い作品がつくられるようになった。
- ・ 今年は台風の影響もあって来場者数が少し伸び悩んだが、約 75,000 人前後の方にお越しいただいた。今年は香川県からの来場者が最も多かったが、2番目に多かったのは東京都の方。瀬戸内国際芸術祭があったためもあるが、毎年東京からいらっしゃる方もいる。
- ・ 来年は 10 回目の記念イベントになるので、少し歴史を振り返ろうと思っている。もともと石あかりロードが生まれたのは、庵治石を PR するためではなく、地元の歴史や原風景を活かしたまちづくりを試行錯誤する中で生まれたもの。本筋に立ち帰って、地域に愛されるものにしていきたい。
- ・ 10 年近くやっているといろいろ想定しなかった効果も生まれてきている。一つは地域の人たちのつながりが深まりつつあること。10 年前と比べて街並みがきれいになった。家の前をきれいにしたり、家を建て直したり、新しい家もできた。急速にこの 10 年間で街並みが変わった。
- ・ 石材事業者は製品を流通に流すので、エンドユーザーとの接点がほとんどない。石あかりロードが、一般のエンドユーザーとの接点になっていて、それが深まりつつあると思う。また、全国の同業の産地や石材事業者が視察にこられている。
- ・ 香川県や高松市の観光振興としても、これまでは、夏のイベントは夏祭りぐらいしかなかった。四国の夏は阿波踊りとよさこいがビックイベントで、香川の夏祭りは知られていなかったが、むれ源平石あかりロードが、夏の香川県の風物詩になりつつあり、行政も力を入れ出した。

<質疑応答>

質問：エンドユーザーという話もあったが、石あかりはどれくらい売れているのか？

答え：5 年目ぐらいまでは結構売れていた。出した作品の 4 分の 1 から 3 分の 1 くらいは売れた。半分くらい売れたときも、同じ作品が 3 つ 4 つ売れたこともあったが、今は売るのに非常に困っていて、今年は一ケタ台。去年は 40 個近く売れたので、今年、なぜ極端に販売数が落ちたのかわからない。5 年目ぐらいまでは、作品が売れたので、毎年新しい作品ばかりだったが、今年も 3 年連続など同じ作品が出ている。売れないと新しい作品をつくるきっかけにならない。一般の方からもデザイン募集をして、実行委員会で 10 作品を選び、石屋さんにつくってもらって毎年新しい作品を出すようにはしている。今年も『むれ源平石あかりロード 2013 ロードマップ』に 166 点掲載されているが、そのうち 70 点近くは新しい作品。

質問：作品は、通常の仕事の合間に作っているのか

答え：1 回目は負担にならないように、自分のところに余っている材料で、仕事の合間に造ったが、だんだんお客様が増えてくると、仕事の合間ではなく、仕事時間中に必死になって造るようになった。

答え：クリエイティブなものをつくっている人にありがちだが、誠心誠意込めてつくっても、売るのは別話。石屋さんもどちらかというところに近いようなところがある。墓石は流通を通して売ってきたので、直接見せ方売り方を工夫することはない。最初は物珍しいこともあって売れたが、今のニーズがどこにあるのかを探るため、地元の大学と連携してアンケートを取っている。今まで販売のことはあまり強調してこなかった。今年からは販売ということをもっと意識しようとしている。そういう意味では、いろいろな結果がこれから出てくるかもしれない。値段も安いものではないので、買うためにむれ源平石あかりロードにいらっしゃっているお客さんも増えている。衝動買いできるような価格ではなく、どういうふうにしたらビジネスとして石あかりに商品価値が出るかが一つの課題。イベントとしては一定の成果があったが、ビジネスとしての成果はまだまだこれからというのが実情。

質問：実際に、作品を買う場合、輸送費は別途かかるのか。

答え：別途必要。石あかりは結構重く、小さいものでも2~3キロはある。持って帰れるものもあるが、夏の暑いときに、持ち歩くのは大変。数千円の軽くて小さいものはよく売れている。

質問：それぞれの石屋さんでデザインしているのか？

答え：デザインを募集しているもの以外は、そうだ。作品はイベントが終われば展示されないが、ネット上の専門サイトで売っている。

石屋さんも墓石だけではなく、新しい可能性にチャレンジして商品となるものをつくっているが、なかなか難しい。

質問：作家さんを招待したりはしないのか？

答え：一般を対象にした公募の中に作家の方もいるかもしれないが、地元で作家活動をしている方もおられ、そういった方を尊重しなければならないので、いわゆる作家の招聘はしていない。石屋さんが、工場の片隅にあった古い材料などを引っ張り出して、それを眺めて作り出している。先にデザインがあって作っている人は少ない。値段が高いと思われるかもしれないが、おそらくこの値段には材料の石代は入っていない。大量に注文されると、逆に高くなる。実行委員会としては仮に50個注文がきても作れる値段にしておいてくれとっているが、その割には安い値段。在庫がないので、10何個になると材料を一から買わなければならない、その材料費を含めた値段の設定にしてしまうと高くなって売れないのが現状だ。

以上

“生活文化創造都市推進事業”
高松地域会議 実施報告書

平成 26 年 3 月発行

編集・発行 一般財団法人 日本ファッション協会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-5-1
神保町須賀ビル7階
TEL 03-3295-1311 FAX 03-3295-3295

